

# 光ミュージアム 研究紀要 自然科学

HIKARU MUSEUM

第8号 2014.3

光ミュージアム 研究紀要 自然科学 第8号

平成26年3月31日発行  
編集・発行 光ミュージアム  
〒506-0051 岐阜県高山市中山町175  
TEL 0577-34-6511  
FAX 0577-34-6065  
<http://www.h-am.jp>

光ミュージアム   
HIKARU MUSEUM | 光記念館

# HIKARU MUSEUM



[www.h-am.jp](http://www.h-am.jp)

## 目次

## 岐阜県の独鈷石 .....3

吉朝則富

- 1,はじめに
- 2,研究の歩み
- 3,形態分類について
- 4,集成について
- 5,個々の独鈷石解説
- 6,未製品について
- 7,贗作について
- 8,分布について
- 9,独鈷石の機能について
- 10,岐阜県の独鈷石の特性について
- 11,おわりに

## 館蔵資料紹介:飛騨山地のデボン系福地層産床板サンゴ化石

*Thamnopora hayasakai* Niko, 2005 について .....44

児子修司

## 岐阜県の独鈷石

吉朝則富

日本考古学協会会員

日本旧石器学会会員

飛騨考古学会編集局

## 1,はじめに

本稿は、岐阜県より出土した縄文時代の呪術具である、いわゆる「独鈷石 どっこいし」について、その詳細をまとめたものである。

独鈷石とは、縄文時代後・晩期（約 4,500 年～ 2,500 年前）という限られた時期に、東北地方から関東、中部地方という限られた地域に出現する、用途不明で特殊な形状を有する石製品である。名称は仏教秘具の独鈷杵（とっこしょ）に似ていることから、明治期にこのように呼ばれるようになったらしい（文献 95）。

あるいはまた、下野国（しもつけのくに）北部（栃木県）に「独鈷沢とっこざわ」の地名があつて、ここで神代石（じんだいせき）をみつけたという記述が江戸時代にあることから、命名起源の可能性が指摘されている（文献 104）。

他に、古くは雷鈷（らいこ）・石鈷（せつこ）、近年では独鈷状石器、独鈷状石製品、白川型石器などと呼ばれることがある。それは先端部形態に斧と槌（つち）の 2 様があること、実用品であるのか信仰的な遺物であるのかがなお判然としない事などにおいて、問題点が多くあるからに他ならない。なお白川型石器とは初出文献に飛騨白川村出土の 2 点があることから名称の由来となっている（文献 77）。

平成 20 年、筆者は『斐太紀』誌上において飛騨地方出土の独鈷石についての論考を行った（文献 120）。これにより、全国を視野に入れた飛騨の独鈷石の分布傾向はほぼ把握されるに至ったが、紙数の都合上、個々の資料の解説や出典の提示はかなわなかった。これに加えて、筆者の独鈷石分類案においては頭部形態の相違等を加味した岡本孝之分類案（文献 114）と比較するとやや精緻さを欠く点において、本稿では集成表に岡本分類を併記し、集成図においても配列に留意して、より詳細な集成を目指したものである。

さらに美濃地方の発見例を加えることにより、岐阜県の分布状況が明確となり、全国集成を推進している研究者に対し、有効な情報を提供出来るものと期待している。

なお文献探査については、岐阜県にかかわる重要なものに限らせていただき、全てを網羅したものではない事を明記するとともに、美濃地方の文献についても、恐らく遺漏があろう事も陳謝しておきたい。

名称については、独鈷状の石器であるという認識のもとに、独鈷石と呼称しておく。文中の敬称は省略させていただいた。



独鈷石(遺物No86)

2.研究の歩み

18 世紀後半、先史考古学の先駆者と呼ばれる木内石亭（きのうちせきてい）の著した『雲根志』（前編五巻後編四巻・三編六巻）の後編四、一四（1773 年）に神代石として「飛驒の高山の好石の友福島某滄洲と號す人あり。明和八年（1771 年）九月高山近邊白河といふ所にて掘得たりとして奇石を恵めり。其形長さ八寸ふとさ一握り、少しゆがみてひらみあり、中に二つ鏑あり。両方には刃方あり、同じ所より掘得たるとてかたちは寸分ちがはずして、黒色なると白石なるとの二つを掘得たるとて白き方は主人にとどめ置、黒き方を予に投ず。今珍藏の一つとす。是何たるものといふ事をしらず。其形図のごとく、元来造りなせしものと見ゆ。」とあり、形は第 1 図 -1 である。

その後三編巻之五附録（1801 年）に再び登場し、より詳しく図説がある。即ち黒色のものは「石質堅剛にして其色純黒なり。飛驒国白川山にて穿得たり。同州高山福島滄洲珍藏す」とあり、白色のものは「形状図の如く白色にして堅硬なり。同州同所より穿得たり。同州同所福島氏の珍藏なり」と記され、第 1 図 2 に示した独鈷石 2 点の図が添えられている。この 3 つの図を比較すると、後編四、一四の図は黒色のものを指していると思われ、反りも表現されている。これに対し白色のものは直線的で鏑が大きく表現され「かたちは寸分ちがはずして」の説明とは少し異なっている。恐らく図の稚拙さにも由来するのであろうが、正確な図とは言い難い。

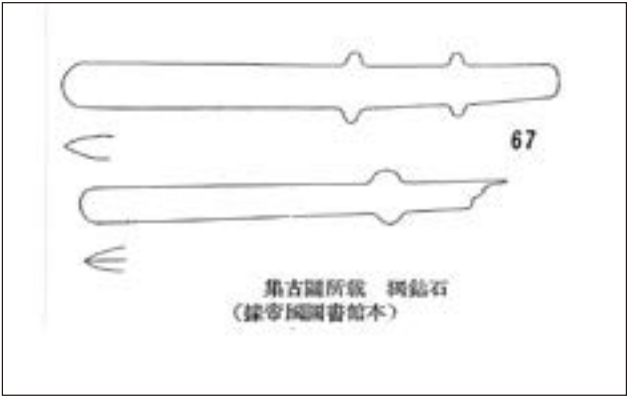
滄洲は、二本長嘯（加賀屋）とともに頻繁に石亭と書簡を交わし、石器についての認識を深めていた。また小森家所蔵の滄洲コレクション（現岐阜県指定重要文化財）中にみられる白色の独鈷石（遺物No.86 以下No.00 と略）が残された 1 点である可能性は高い（文献 126）。文献に登場する最も古い独鈷石である。

二本長嘯も自身の蒐集品を『神代石図』にまとめ、石亭に披露している（文献 3）。独鈷石は 2 点みられ、宮川町瑞穂資料（No.71）と青森県大畑出土品である。後者については江戸時代、北海道経営にたずさわった飛驒屋久兵衛四代益郷（ますさと）によってもたらされた可能性が指摘されている（文献 129）。

なお、富山県婦中市の自清道人の「古器書写帳」（文献 131）にもこの 2 点が描かれており、図は実物により忠実なものとして注目される（第 1 図 3）。図には「飛驒国白川出、石質如鉄、周り三寸三分、長四寸」とあり、恐らく滄洲の黒色のものを指すと思われる。長さ 4 寸とあり推定長は 16 cm 程度であろう。『雲根志』の図はいずれも完形で描かれているが、「古器書写帳」では 4 分の 1 を欠失しており、正確に写生したものと考えられる。長さについてもこちらを信用したい。



第1図 『雲根志』(1, 2) 及び「古器書写帳」(3)の独鈷石(文献1.131)



第2図 『集古図』の独鈷石（文献2他）

次に、寛政元年（1789 年）に藤井貞幹が著した『集古図』巻一二に飛驒出土の独鈷石が紹介されている（文献 2）。これは飛驒国白川郷天生村駄畝所出とあり、寸法は定かでないが細長い石剣状の身部に一方に偏って 2 個の鏑部があり、少なくとも一端に刃部を備えている（第 2 図上）。図に見る限り完形の独鈷石であり、山岸良二による非対称型独鈷石とみなされよう（文献 75・126）。駄畝という地名は現在の河合町天生地内には見当たらないが晩期の遺跡として家の腰遺跡が知られている。

明治以降の研究史は、岡本（文献 90）、山岸（文献 104）等により詳しく述べられているので、ここでは省略させていただき、本稿では岐阜県に関するもののみに触れておきたい。

明治 19 年（1886 年）、古川町の古器物愛好家佐藤泰郷（やすさと）のまとめた巻物『千代の鏡』正統二帖に 8 点の独鈷石が彩色で紹介された。うち 7 点が飛驒出土品でいずれも完形の逸品揃いであった（文献 4 第 3 図）。

田中正太郎は、東京人類学会雑誌に飛驒の遺跡の遺物について多数の報告を行ったが、坪井正五郎の門下生になると

『日本石器時代人民遺物発見地名表』第一版の編集にかかわり、二版・三版と進める中で独鈷石（石鈷）も 5 点報告している（文献 7）。

大正 8 年（1919 年）に高山の神通寺住職朝戸高山（あさとこうざん）が著した記述中には、独鈷石は 10 数点ありこのうち 5 点が現在も同寺に所蔵される（文献 9）。彼が蒐集した考古資料は、附石器図「石のまきもの」と共に県重要文化財に指定されている。

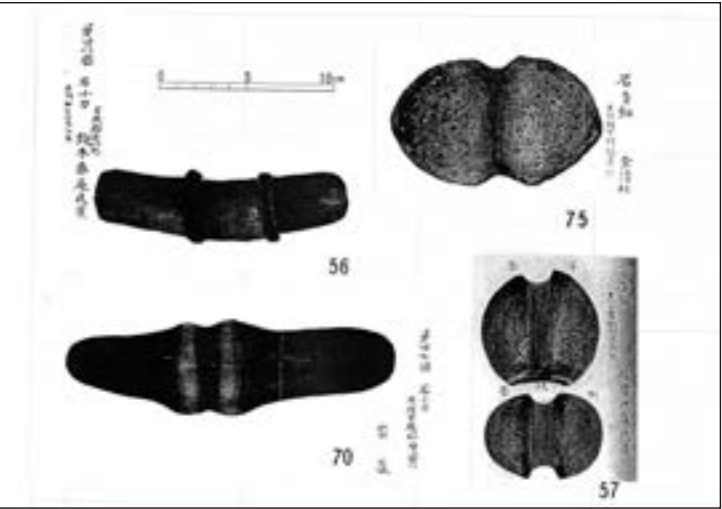
美濃の研究者林魁一（かいいいち）も、1930 年代に岐阜県各地を巡り数多くの遺跡遺物報告を熱心に行ったが、独鈷石に関するものも 7 編みられる（文献 11、12、17～21）。

昭和 5 年（1930 年）に発行された『考古学』1 号において岡山準は、「飛驒石器時代遺物分布」を発表し、この中で飛驒には両頭石斧と独鈷形の石斧があるとした。遺跡地として独鈷石 3 ケ所、石鈷 2 ケ所をあげ、両者を区別している。なお御物石器についても彫刻のあるものを石槌、無文のものを枕石としている（文献 127）。

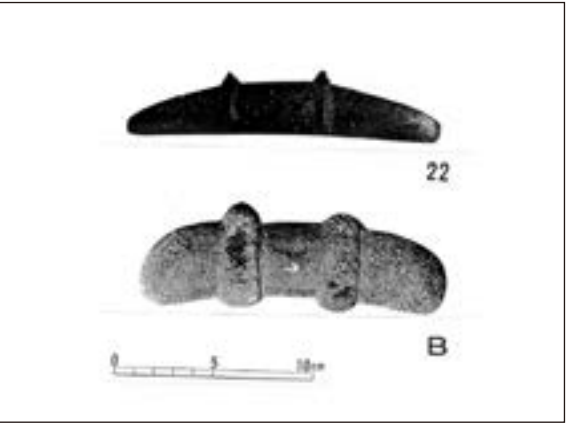
昭和 8 年（1993 年）には飛驒考古学会が江馬修（なかし）らにより創設され、10 年に刊行された『飛驒石器時代遺跡地名表』には 21 ケ所の遺跡からの独鈷石の出土が記載されている。図示はされていないが信頼性の高いものであった（文献 15 以下『地名表』と略）。

その後、多賀秋五郎の『飛驒史の研究』（文献 22）にもそのまま 21 ケ所の出土遺跡が記載されるが、別に写真資料として 2 点が紹介されている（第 4 図）。

昭和 37 年（1962 年）の『岐阜県遺跡目録』（文献 31、以下『目録』と略）では何故か 14 ケ所に数を減じ、そのうち 2 点は両頭石斧として扱われている。



第3図 佐藤(文献4)による独鈷石の一部



第4図 多賀(文献22)の写真による板殿東野資料(22)と参考資料(B)

昭和 47 年（1972 年）の『岐阜県史』通史編原始（文献 40、以下『県史』と略）では再び 21 ヶ所プラス両頭石斧 3 ヶ所に復活したが、当時の判断では、例えば神通寺の三ッ石資料（No.83）などは分銅もしくは石錘として扱われ、独鈷石には含めていないようである。

昭和 62 年（1987 年）、筆者による飛驒の独鈷石集成が環状石斧・多頭石斧・石冠とともになされた（文献 62）。発掘調査による出土品や個人的に所蔵される資料を網羅した、総数 64 点を、鈴木道之助の分類（文献 50）を参考に 4 分類したもので、これに据置型を細分類し（Ⅱ -3・Ⅲ -2）、飛驒の特性と考えた。測図は 38 点が添えられる。当時、渡辺誠・山岸・後藤信佑らによって新たな隆盛期を迎えた独鈷石研究（文献 39・57・58）の、濃密分布域に飛驒も仲間入りすることとなったのである。

その後の 20 年間は、発掘資料や個人所蔵資料の報告が 25 例あまりあり資料数の増加をみたが、特に 1995 年の山岸論文（文献 75）では、関東地方からみた飛驒地方の独鈷石の特性を論じ、その隆盛時期が関東地方よりやや遅れることと、据置タイプの類例数から特殊祭祀に儀器化した独鈷石が飛驒地方に存在することが追認され、一つの評価が得られた。

2002 年以降、美濃地方では沢田伊一郎による御物石器・独鈷石への積極的な調査活動が開始され、詳細なデータが提示された（文献 100・102・118・119）。

平成 20 年（2008 年）の筆者による「飛驒の独鈷石について」（文献 120）では、総数 89 点を提示することが出来た。また有溝石斧をその祖型とする考え方（文献 115）にも同意を示し、集成に加えるべく検討を行った。分類にも若干の変更を加え、Ⅰ型の 2 類を槌状頭部のもの、Ⅱ型 2 類を鏑が一方に極端に片寄るもの、Ⅱ型 3 類に据置型、Ⅲ型 2 類に鏑の片寄るもの、Ⅲ型 3 類に据置型をそれぞれ分類した。分類法はなお流動的であり、あくまで便宜的なものとしておきたい。

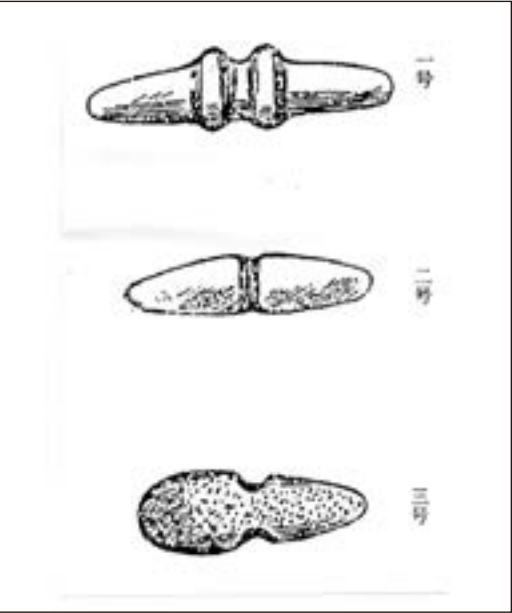
全国的に独鈷石研究の進展が著しい現在、岡本・山岸・滝沢規朗らによる新しい論考が次々と出され（文献 76・77・95・97 等）、全国分布の様相が次第に明らかとなっている。同時に機能や変遷の問題が論じられ、新たな研究段階に入ったことが実感されるのである。

3.形態分類について

独鈷石の形態分類は、古くは大野雲外により 3 種類の分類がある（文献 8、第 5 図）。中間部の形態による分類であり、先端部形態には触れていない。

その後、山内清男・渡辺誠・野口義麿・能登健・米田耕之助らの分類案（文献 90 参照）が示され議論を呼んでいるが、その内容については省略させて載く。

1987 年の著者の分類は、鈴木分類案を基礎としている（第 7 図・第 8 図）。即ちⅠ型は中央部の隆起はほとんどなく挟まれた様になっているもので、これはさらに①偏平で石斧状の両刃の刃部を形成するもの。②断面が楕円形で両頭部が弧状に反り、先端部が槌状の円形をなすもの。③両頭部が半球状をなすものに細分類されるが、③は石錘の可能性もあるとする。Ⅱ型は中央の隆起がリング状に発達したもので、隆起部の断面は三角状である。これには①、偏平で石斧状の頭部をもつもの。②、頭部断面は楕円形で直線的に延び、両端が



第5図 大野雲外の独鈷石分類(文献8)

槌状になるもの。③

は鈴木案では②の反る種類のものとして  
いるが、飛驒では該当品がなく、リングが全周せず底部を平坦にして据置ける状態にしたものがいくつかみうけられる事から、吉朝案ではこれを③とした。Ⅲ型は隆起した節はます

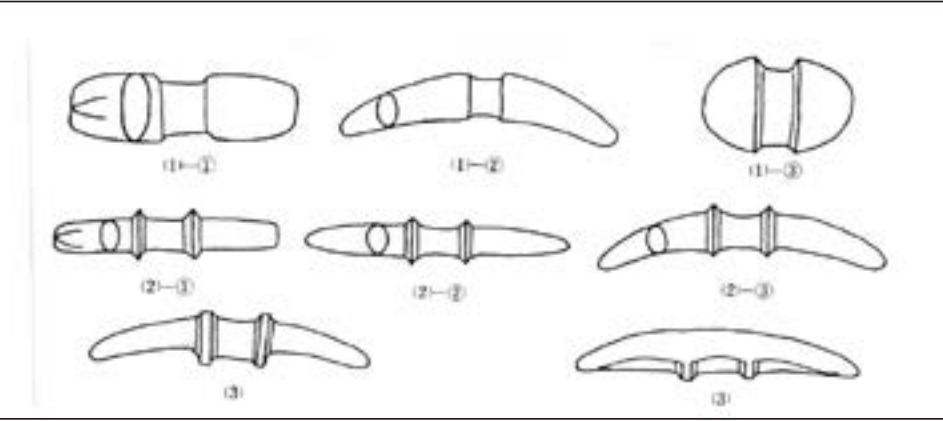
ます発達してより高くなり、断面が台形状をなすもの。鈴木は「頭部はいずれも大きく反っており、楕円形をなす」としているが、飛驒ではこれに据置型の②を加えた。Ⅳ型は特殊なものとして有孔のものを分類したが、多頭石斧の類型に入るものとも考えられ、飛驒に類例もないことから、今は特に必要ないと考えるに至っている。

量的にはⅠ -3 類とⅡ -1 類がそれぞれ 28%、26% を占め、Ⅱ -3 類・Ⅲ -1 類が 16% ずつを占めるとした。またⅠ型からⅢ型への変遷も示唆している。

筆者の分類は、飛驒地方の独鈷石を念頭に入れて分類したものであり、特に先端が尖った槌状となるものがほとんど見られない点において、飛驒の特性を重視した分類となっている。従って分け方に苦慮する個体も出て来る可能性はあった。この点で 1985 年の後藤分類案は、より高い評価を与えられることとなる。即ち中間部形態により大きく 2 分し、時期的な区分も含めて計 14 分類した論考である（文献 58）。後藤は有溝（A 型）から隆帯（B 型）への変化を相対的な時期差とするだけでなく、系統の差異として存続するとも想定している（第 8 図）。

独鈷石の分類は、形態面での偏向性や地域性もあって一様ではないが、現在全国的視野に立った最新分類案として、岡本の分類（文献 114）を紹介し参考したいと考える。

先ず先端部形態から石斧型・尖頭型・丸頭型・石棒型に 4 大別し、他に上下非対称型や西日本型などを分類する。次に中間部形態から 1 ～ 7 型に細分類し、凹帯の変化や対称・非対称・曲線化などを加味するもの



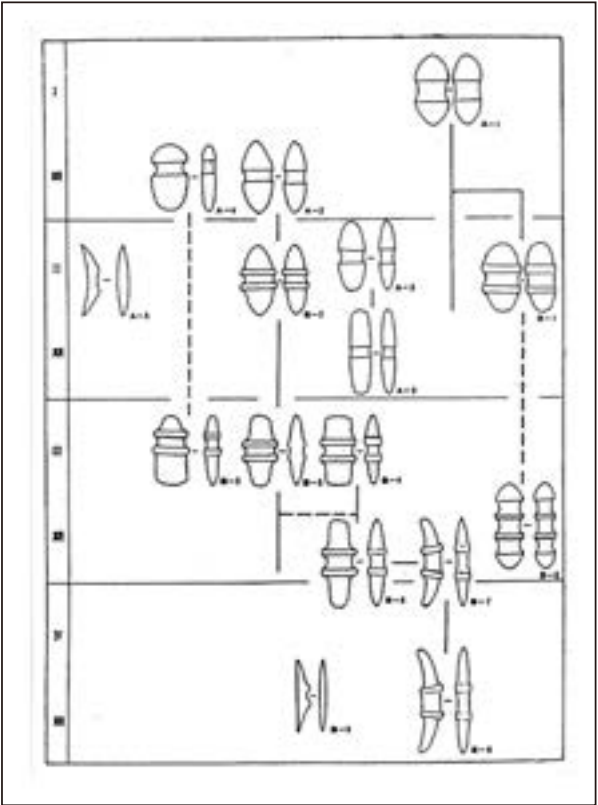
第6図 鈴木による独鈷石分類(文献50)

| Type |   | 形 | 状 |
|------|---|---|---|
| Ⅰ型   | 1 |   |   |
|      | 2 |   |   |
|      | 3 |   |   |
| Ⅱ型   | 1 |   |   |
|      | 2 |   |   |
|      | 3 |   |   |
| Ⅲ型   | 1 |   |   |
|      | 2 |   |   |
| Ⅳ型   |   |   |   |

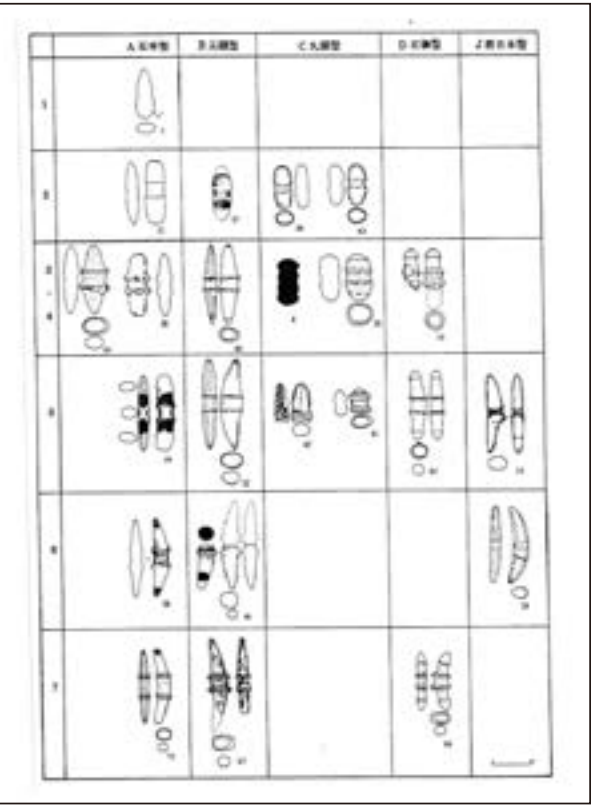
第7図 吉朝による独鈷石形態分類表（文献62）

である（第9図）。変遷としては上下非対称から対称化へ（註．石斧を基本とするので図は縦に表示し、その場合の上下）、反りは直線的から非対称・屈曲化へ、挟りから凹帯・隆帯へ、全周から切り込み付へ、といった変遷をたどる。

この分類でほぼ全ての独鈷石は網羅出来るとともに、その変遷が概観されるのである。なおミニチュアや省略形・特殊形は別に分類される。今回の筆者の岐阜県集成では、2008 年集成時の分類とともに岡本分類を併記することとした。但し（ ）付は筆者の見解である。



第8図 後藤による分類案（文献58）



第9図 岡本による分類案（文献114）

#### 4.集成について

今回、飛騨で 94 点、美濃で 20 点を集成した。ただし重複していると考えられるものが数点ある他、1984 年の集成の中から贋作と判断して除外したものが 1 点ある。新たに有溝石斧を 5 点加え、特殊型として青屋資料（No. 30）と立石資料（No. 46）、省略型として家ノ下資料（No. 78）を加えた。従って総数の表記に変化は起こりうる。個々の解説で詳しく述べたい（第 2 表）。

判断される限り推定長を出し、図版で示した。なお図版Noは集成Noと同一である。中央部高は挟り部分の巾で、中央部厚は挟り部分の厚みである。厚みは着柄を前提とした場合の一つの基準となろう（第 3 表）。

石質は報文の記述のまま記したが、古い研究者によっては「砂岩」としてひとまとめにした場合が多い事も注意する必要がある。安山岩や凝灰岩などの知見が乏しかったのかも知れない。

所有者は主に文献に登場した時点のものであり、現在の所有者とは限らない。発掘出土品は各報告書を発行した市町村教育委員会あるいは県文化財保護センターの所蔵とする。

文献は主に岐阜県にかかわるものを提示し、他地域のものは割愛した。遺漏のものは順次追加している。

#### 第1表

岐阜県の独鈷石集成表

| 番号 | 遺跡名    | 所在地       | タイプ  | 岡本分類        | 最大長   | 推定長 | 中央部高 | 中央部厚 | 石質   | 所有者      | 文献                                                           |
|----|--------|-----------|------|-------------|-------|-----|------|------|------|----------|--------------------------------------------------------------|
| 1  | 垣内     | 高山市上野町垣内  | Ⅱ -4 | 石斧 5        | 205   | —   | —    | —    | —    | （平田平右工門） | 13・15・<br>22・31・<br>40・62・<br>120・125                        |
| 2  | サゲン洞   | 塩屋町臼元     | Ⅱ -1 | 石斧 4        | (84)  | 108 | 41   | 25   | 砂岩   | 田中哲郎     | 15・22・<br>31・40・<br>62・120・<br>125                           |
| 3  | サゲン洞   | 塩屋町臼元     | Ⅱ -1 | 石斧 5        | (70)  | 190 | 34   | 28   | 砂岩   | 東山中学校    | 68・125                                                       |
| 4  | （ ）    | 江名子町      | Ⅱ -1 | 石斧 6        | 154   | —   | 25   | 20   | 緑色片岩 | （谷口二一）   | 62・120・<br>125                                               |
| 5  | （ ）    | 江名子町      | I -3 | 丸頭 2        | 110   | —   | 32   | 35   | 安山岩  | （谷口二一）   | 62・120・<br>125・128                                           |
| 6  | （日枝神社） | 片野町       | Ⅱ -1 | 石斧 5        | (126) | 165 | 35   | 20   | 安山岩  | 高山市郷土館   | 48・62・<br>120・125                                            |
| 7  | 根方やセ畑  | 滝町根方      | Ⅱ -3 | 石斧 6        | (130) | 165 | 45   | 25   | 砂岩   | 洞口和吉     | 62・120・<br>125                                               |
| 8  | 赤保木    | 赤保木町宮ヶ平   | I -3 | （丸頭 2）      | —     | —   | —    | —    | 安山岩  | 村坂又平     | 62・125                                                       |
| 9  | 中切宮野   | 中切町宮野     | Ⅱ -2 | 未製品？        | 150   | —   | 48   | 33   | 粘板岩  | 東義美      | 65・94・<br>125                                                |
| 10 | 中之切    | 生井町中之切    | I -1 | 丸頭 2（石斧 2？） | 125   | —   | 40   | 30   | 緑色片岩 | 大宮武      | 111・120・<br>125                                              |
| 11 | （ ）    | 石浦町       | —    | —           | —     | —   | —    | —    | —    | —        | 62・125                                                       |
| 12 | 亀ヶ平    | 一之宮町山下亀ヶ平 | —    | —           | —     | —   | —    | —    | —    | —        | 15・22・<br>31・35・<br>40・62・<br>110・125                        |
| 13 | 問坂     | 一之宮町問坂    | —    | —           | —     | —   | —    | —    | —    | —        | 15・22・<br>31・40・<br>62・110・<br>125                           |
| 14 | 問坂上    | 一之宮町問坂    | —    | —           | —     | —   | —    | —    | —    | —        | 35・40・<br>62・110                                             |
| 15 | 日影     | 一之宮町日影    | I -1 | 石斧 2        | 150   | —   | 37   | 28   | 閃緑岩  | 神通寺      | 7・9・15・<br>22・35・<br>40・44・<br>50・62・<br>110・120・<br>125・127 |
| 16 | 上岩野    | 清見町牧ヶ洞    | I -2 | 丸頭 2        | (131) | 165 | 48   | 46   | —    | —        | 43・62・<br>120・125                                            |
| 17 | （大西）   | 清見町三ッ谷    | I -3 | （丸頭 2）      | 120   | —   | 46   | 38   | 砂岩   | 島内正夫     |                                                              |
| 18 | 大西     | 清見町三ッ谷大西  | 有溝   | （石斧 1）      | 158   | —   | 44   | —    | 砂岩   | —        | 21・43                                                        |
| 19 | 大西     | 清見町三ッ谷大西  | I -3 | （丸頭 2）      | 173   | —   | 50   | —    | —    | —        | 21・43                                                        |
| 20 | 旗鉾     | 丹生川町旗鉾塚畑  | Ⅱ -1 | 石斧 3        | 125   | —   | 30   | 24   | 砂岩   | 神通寺      | 9・40・44・<br>62・78・<br>105・120・<br>125・128                    |
| 21 | 月出     | 丹生川町旗鉾月出  | Ⅲ -2 | 石斧 6（7？）    | (134) | 180 | 42   | 30   | 砂岩   | 大下慶一     | 62・78・<br>120・125・<br>128・130                                |
| 22 | 板殿     | 丹生川町板殿東野  | Ⅱ -3 | 石斧 5        | 157   | —   | 36   | 18   | —    | —        | 12・22・<br>40・62・<br>120・125                                  |
| 23 | 六仙寺跡   | 丹生川町町方千蔵寺 | Ⅱ -1 | 石斧 3        | 171   | —   | 43   | 30   | 安山岩  | 田口寛彦     | 15・22・<br>31・40・<br>62・69・<br>78・120・<br>125・130             |
| 24 | 下坪広殿   | 丹生川町下坪広殿  | I -2 | 丸頭 2        | 130   | —   | 50   | 35   | 砂岩   | 高山市郷土館   | 62・78・<br>120・125                                            |
| 25 | （滝垣内？） | 丹生川町折敷地   | Ⅲ -3 | 石斧 6        | —     | —   | —    | —    | —    | —        | 15・22・<br>29・62                                              |

| 番号 | 遺跡名   | 所在地        | タイプ  | 岡本分類               | 最大長   | 推定長 | 中央部高 | 中央部厚 | 石質    | 所有者    | 文献                                   |
|----|-------|------------|------|--------------------|-------|-----|------|------|-------|--------|--------------------------------------|
| 26 | 牛垣内   | 丹生川町折敷地牛垣内 | I -3 | 石斧 1 ?<br>(丸頭 2 ?) | (81)  | 完 ? | 32   | 21   | 粘板岩   |        | 85・125                               |
| 27 | カクシクレ | 丹生川町敷地五味原  | I -3 | 丸頭 2               | 116   | —   | 48   | —    | 砂岩    | (橋本繁蔵) | 78・130                               |
| 28 | カクシクレ | 丹生川町敷地五味原  | I -3 | 丸頭 2               | 84    | —   | 56   | 52   | 凝灰岩   |        | 80・125                               |
| 29 | 渚     | 久々野町渚冲垣内   | —    | —                  | —     | —   | —    | —    | —     | —      | 7・15・22・31・40・62・125・127             |
| 30 | 大日堂   | 朝日町青屋谷口    | 有溝   | 石斧 3               | 242   | —   | 50   | 38   | 砂岩    | 神通寺    | 15・17・22・40・62・74・90・120・125         |
| 31 | 石原    | 朝日町寺沢石原    | Ⅲ -2 | 石斧 5               | 163   | —   | 35   | 26   | 砂岩    | 山上寿男   | 15・17・22・40・62・99・120・125            |
| 32 | 段保    | 朝日町見座段保    | Ⅲ -1 | 石斧 5               | (141) | 170 | 45   | 25   | 硬砂岩   | (森本賢三) | 25・31・40・62・120・125                  |
| 33 | 前橋    | 朝日町黒川前橋    | I -3 | 丸頭 2               | 124   | —   | 29   | 21   | 輝石安山岩 |        | 66・125                               |
| 34 | ごうろう  | 朝日町万石ごうろう  | I -2 | 石斧 1               | 136   | —   | 55   | 37   | 流紋岩   | 林雅一    | 91・93・101・120・125                    |
| 35 | ( )   | 荘川町        | I -3 | (丸頭 2)             | 98    | —   | 54   | —    | —     |        | 62・125                               |
| 36 | 上ノ段   | 国府町三川上ノ段   | —    | —                  | —     | —   | —    | —    | —     |        | 6・7・15・19・22・28・31・40・62・116・125・127 |
| 37 | 大畑    | 国府町三川大畑    | —    | —                  | —     | —   | —    | —    | —     |        | 15・22・28・31・40・62・116・125            |
| 38 | アワラ   | 国府町三川アワラ   | 有溝   | 石斧 1               | (134) | 142 | 53   | 35   | 砂岩    | 上原真昭   | 120・121・122                          |
| 39 | 宇津江   | 国府町宇津江巾    | Ⅲ -3 | 石斧 6               | 159   | —   | 32   | 15   | 砂岩    | 村坂又平   | 55・62・116・120・125                    |
| 40 | 中塚    | 国府町宇津江中塚   | Ⅱ -2 | (石斧 5)             | (77)  | 180 | 44   | 15   | 閃緑岩   | 洞国造    | 74・116・125                           |
| 41 | 荒城神社  | 国府町宮地宮垣内   | I -3 | 丸頭 2               | 97    | —   | 66   | —    | 安山岩   | 荒城神社   | 30・62・116・125                        |
| 42 | 荒城神社  | 国府町宮地宮垣内   | I -3 | 丸頭 2               | 89    | —   | 51   | 54   | 安山岩   | 荒城神社   | 30・62・116・125                        |
| 43 | 荒城神社  | 国府町宮地宮垣内   | Ⅱ -2 | 石斧 5               | 140   | —   | 27   | —    | 花崗岩   | 坂本重次郎  | 62・116・120・125                       |
| 44 | 荒城神社  | 国府町宮地宮垣内   | I -3 | 丸頭 2               | 106   | —   | 45   | 42   | 蛇紋岩   |        | 71・116・125                           |
| 45 | 土洞    | 国府町瓜巢土洞    | Ⅱ -1 | 石斧 6               | (135) | 223 | 45   | 35   | 凝灰岩   | 田中勝    | 112・116・120・125                      |
| 46 | 立石    | 国府町漆垣内立石   | 特殊   | 扁平                 | 185   | —   | 59   | 30   | 砂岩    |        | 73・105・116・120・125                   |
| 47 | 安城寺   | 国府町上広瀬安城寺  | Ⅱ -2 | 石斧 6               | (164) | 190 | 38   | 24   | 粘板岩   | 横田作助   | 108・116・120・125                      |
| 48 | 蔵柱上野  | 上宝町蔵柱上野    | Ⅱ -1 | 石斧 3               | (112) | 158 | 33   | 26   | 玢岩    | 上野一郎   | 27・31・40・62・120・125                  |
| 49 | 下垣内   | 上宝町蔵柱下垣内   | —    | —                  | —     | —   | —    | —    | —     | —      | 15・19・20・22・31・40・62・125             |

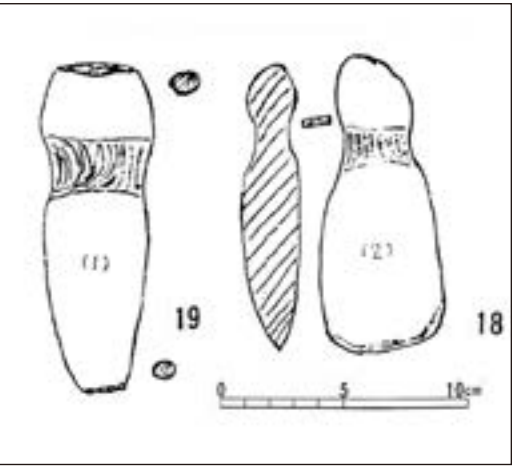
| 番号 | 遺跡名    | 所在地        | タイプ    | 岡本分類        | 最大長   | 推定長 | 中央部高 | 中央部厚 | 石質     | 所有者      | 文献                                       |
|----|--------|------------|--------|-------------|-------|-----|------|------|--------|----------|------------------------------------------|
| 50 | (蔵柱)   | 上宝町蔵柱      | I -3   | 丸頭 2        | 97    | —   | 62   | 44   | 花崗閃緑岩  | ふるさと歴史館  | 107・125                                  |
| 51 | 宮原     | 上宝町宮原      | I -3   | 丸頭 2        | 110   | —   | 46   | 45   | —      |          | 27・62・125                                |
| 52 | ( )    | 上宝町本郷      | Ⅱ -1   | 石斧 3        | (95)  | 147 | 30   | 18   | 砂岩     | 高山市郷土館   | 62・125                                   |
| 53 | (桂本神社) | 上宝町在家      | Ⅱ -2   | 石斧 5        | (133) | 270 | 48   | 29   | 砂岩     | 坂本重次郎    | 62・120・125                               |
| 54 | ( )    | 上宝町        | Ⅲ -3   | 石斧 5        | 182   | —   | 36   | 30   | 砂岩     | 神通寺      | 4・9・44・62・120・125・128                    |
| 55 | 黒内     | 飛騨市古川町黒内五ヶ | Ⅱ -1   | (石斧 5)      | 188   | —   | 45   | 22   | 砂岩     |          | 12・15・22・31・40・62・125                    |
| 56 | (釜ヶ洞)  | 古川町太江      | Ⅲ -1   | 石斧 6        | 140   | —   | 33   | —    | —      | (鈴木泰庵)   | 4・62・120・125                             |
| 57 | 高野     | 古川町高野      | I -3   | 丸頭 2        | 67    | —   | 55   | 35   | —      | (塚越源造)   | 4・62・125                                 |
| 58 | 高野     | 古川町高野左官堂   | Ⅱ -2   | 石斧 5        | 184   | —   | 41   | —    | 安山岩    | 村坂又平     | 44・55・62・120・125                         |
| 59 | 谷      | 古川町谷       | Ⅱ -1 ? | (丸頭 3 ?)    | 120   | —   | —    | —    | —      |          | 38・62・125                                |
| 60 | 中野山越   | 古川町中野山越    | I -3   | 丸頭 2        | 74    | —   | 56   | —    | 安山岩    | 上口長七     | 125                                      |
| 61 | 中野山越   | 古川町中野山越    | I -3   | 丸頭 2        | 90    | —   | 55   | 47   | 安山岩    | 重田繁憲     | 74・120・125                               |
| 62 | 下野     | 古川町下野      | Ⅱ -1   | 石斧 3        | (79)  | 146 | 36   | 21   | 花崗岩    | 蒲助四郎     | 120・125                                  |
| 63 | ( )    | 古川町数河      | I -3 ? | (丸頭 2)      | 167   | —   | 54   | —    | —      |          | 12                                       |
| 64 | ( )    | 河合町角川入角    | Ⅱ -3   | 石斧 5        | (111) | 186 | 29   | 26   | —      | (柏木氏)    | 5・7 ? 15・22・62・120・125・127               |
| 65 | ( )    | 河合町角川      | Ⅱ -3   | 石斧 5        | 170   | —   | 36   | 22   | 閃緑岩    | 瀬ノ上尹男    | 4・62・120・125                             |
| 66 | 西沼     | 河合町羽根荒屋ノ下  | I -3   | 丸頭 2        | 96    | —   | 58   | 58   | 安山岩    | (坂井キク子)  | 82・120・125                               |
| 67 | (駄畝)   | 河合町天生      | Ⅱ -4 ? | —           | —     | —   | —    | —    | —      |          | 2・14・24・120・125・126                      |
| 68 | 跡津     | 神岡町跡津小洞    | I -1   | 石斧 2        | 173   | —   | 42   | 23   | 砂岩     | 神通寺      | 9・62・120・125                             |
| 69 | 数河     | 神岡町数河      | Ⅲ -3   | 石斧 5        | 185   | —   | 38   | 29   | 砂岩     | 片桐美良     | 9・44・62・120・125                          |
| 70 | ( )    | 神岡町        | Ⅱ -1   | 石斧 3        | 181   | —   | 46   |      | —      | (佐藤泰郷)   | 4・13・62・125                              |
| 71 | 瑞穂     | 宮川町杉原瑞穂    | Ⅲ -1   | 石斧 6        | 214   | —   | 31   | 29   | 砂岩     | 二木酒造     | 3・4・13・15・22・31・40・60・62・120・125・127・128 |
| 72 | ( )    | 宮川町杉原      | Ⅲ -1   | 石斧 6        | (182) | 230 | 39   | 28   | 凝灰質安山岩 | 坂下小学校    | 62・120・125                               |
| 73 | 中沢上    | 宮川町中沢上 上平  | Ⅲ -1   | 石斧 6        | (160) | 213 | 36   | —    | —      | 水畑重平     | 51・62・120・125                            |
| 74 | ( )    | 宮川町打保      | Ⅲ -3   | 石斧 7        | (120) | 155 | 30   | 27   | 砂岩     | 高山市郷土館   | 15・22・62・120・125                         |
| 75 | (塩屋)   | 宮川町塩屋向島    | I -3   | 丸頭 2        | 118   | —   | 58   | —    | —      | 金清神社     | 4・15・22・62・125                           |
| 76 | (塩屋)   | 宮川町塩屋ほそおき  | I -3   | (丸頭 2)      | 138   | —   | —    | —    | —      | 栗山コレクション | 61・62・125                                |
| 77 | 金清神社   | 宮川町塩屋島     | Ⅱ -2   | 石斧 5        | (109) | 140 | 42   | —    | 凝灰岩    |          | 92・125                                   |
| 78 | 家ノ下    | 宮川町家ノ下     | 省略形    | 扁平          | 88    | —   | 15   | —    | 片岩     |          | 81・120・125                               |
| 79 | 家ノ下    | 宮川町家ノ下     | I -3   | 丸頭 2        | 108   | —   | 66   | 57   | 安山岩    |          | 81・120・125                               |
| 80 | 前田     | 宮川町西忍宮ノ前   | I -2   | 石斧 1 (丸頭 ?) | 148   | —   | 45   | 32   | 蛇紋岩    |          | 86・120・121・122・125                       |

| 番号  | 遺跡名    | 所在地           | タイプ    | 岡本分類       | 最大長   | 推定長 | 中央部高 | 中央部厚 | 石質    | 所有者     | 文献                               |
|-----|--------|---------------|--------|------------|-------|-----|------|------|-------|---------|----------------------------------|
| 81  | 宮ノ前    | 宮川町西忍宮ノ前      | I -3   | 丸頭 2       | 129   | —   | 66   | 38   | 安山岩   |         | 96・125                           |
| 82  | 宮ノ前    | 宮川町西忍宮ノ前      | I -3   | 丸頭 2       | 90    | —   | 63   | —    | 濃飛流紋岩 |         | 103・125                          |
| 83  | 三ツ石    | 下呂市乗政三ツ石      | I -3   | 丸頭 2       | 120   | —   | 60   | 48   | 凝灰岩   | 神通寺     | 9・15・22・62・125                   |
| 84  | 桜洞神田   | 萩原町桜洞神田       | I -1   | 丸頭 3(石斧 2) | 120   | —   | 53   | 34   | 流紋岩   | 縣神社     | 10・15・22・31・40・48・62・120・124・125 |
| 85  | のぢやら   | 萩原町山之口上之田     | —      | —          | —     | —   | —    | —    | —     |         | 15・22・40・62・125                  |
| 86  | ( )    | 萩原町尾崎         | Ⅲ -1   | 石斧 6       | (177) | 217 | 37   | 24   | 砂岩    | 小森元三郎   | 62・120・125・126・128・133           |
| 87  | 小つぼ垣   | 馬瀬町黒石牧戸       | I -3   | 丸頭 2       | 104   | —   | 40   | —    | 砂岩    | 牧戸富喜雄   | 56・62・125                        |
| 88  | 無笹     | 馬瀬町黒石無笹       | Ⅱ -1   | (石斧 5)     | 160   | —   | —    | —    | 安山岩   | 中切学校    | 62・125                           |
| 89  | 南垣内    | 小坂町落合南垣内      | I -1   | (石斧 2)     | 88    | —   | 32   | 16   | —     | 福応寺     | 33                               |
| 90  | 御母衣上洞  | 大野郡白川村御母衣中ガイツ | —      | —          | —     | —   | —    | —    | —     |         | 40・62・125                        |
| 91  | 荻町上町上  | 白川村荻野上町上      | Ⅱ -1   | 石斧 3       | 120 ? | —   | 40   | —    | 砂岩    | 明善寺     | 40・62・120・125                    |
| 92  | 巾通り    | 白川村島巾通り       | I -3   | 丸頭 2       | 79    | —   | 42   | 37   | 粘板岩   |         | 53・62・125                        |
| 93  | ( )    | 白川村           | Ⅱ -1 ? | (石斧 6 ?)   | 243 ? | —   | —    | —    | —     |         | 1・14・24・62・120・125・126・131・133   |
| 94  | ( )    | 白川村           | Ⅲ -1 ? | (石斧 6 ?)   | 243 ? |     | —    | —    | —     |         | 1・14・24・120・126・131・133          |
| 95  | 松葉平    | 中津川市苗木瀬戸      | Ⅲ -1   | 石斧 6       | —     | —   | —    | —    | —     |         | 23・37・125                        |
| 96  | 斧戸     | 手賀野斧戸         | 有溝石斧   | 石斧 1       | 90    | —   | 39   | 27   | —     |         | 23 ?・37・121                      |
| 97  | 久須田    | 阿木            | I -3   | 丸頭 2       | 129   | —   | 51   | 43   | —     |         | 67・125                           |
| 98  | 久須田    | 阿木            | I -3   | 丸頭 2       | 114   | —   | 66   | 42   | 砂岩    |         | 67・125                           |
| 99  | 久須田    | 阿木            | I -3   | 丸頭 2       | (60)  | 93  | 30   | 30   | 結晶片岩  |         | 67・125                           |
| 100 | 下島     | 福岡町高山         | 有溝石斧   | 石斧 1       | 111   | —   | 36   | 21   | —     |         | 32・40・52・55・122・125              |
| 101 | 洞      | 恵那市長島町 久須見    | Ⅱ -1   | 石斧 5       | 137   | —   | 28   | 20   | —     |         | 54                               |
| 102 | 南野     | 美濃加茂市加茂野町南野   | I -3   | 丸頭 2       | 75    | —   | 30   | 28   | —     |         | 46                               |
| 103 | 北裏     | 可児市土田         | I -3   | 丸頭 2       | 144   | —   | 57   | 36   | 砂岩 ?  |         | 41・44・125                        |
| 104 | 北裏     | 土田            | I -3   | 丸頭 2       | 149   | —   | 67   | 54   | 砂岩 ?  |         | 41・125                           |
| 105 | 車塚     | 加茂郡富加町井高車塚    | Ⅱ -1   | 石斧 6       | (114) | 224 | 39   | 28   | 砂岩    |         | 45・118                           |
| 106 | (車塚)   | 富加町夕田         | Ⅲ -1   | 石斧 6       | (91)  | 200 | 40   | 26   | 凝灰岩   |         | 45・118                           |
| 107 | 若栗     | 関市中之保若栗       | Ⅲ -3   | 石斧 6       | 199   | —   | 37   | 27   | 砂岩    |         | 44・59・72・119                     |
| 108 | 栗野     | 武儀栗野          | —      | —          | —     | —   | —    | —    | —     |         | 23・40・125                        |
| 109 | 十四条    | 本巣郡真正町十四条     | Ⅱ -1   | 尖頭 5       | 137   | —   | 37   | 25   | 凝灰岩   |         | 100                              |
| 110 | 前田     | 郡上市白鳥町前田      | I -3   | 丸頭 2       | 98    | —   | 61   | —    | 安山岩   |         | 18・36・44                         |
| 111 | 森本     | 明宝町森本         | I -3   | 丸頭 2       | 121   | —   | 91   | —    | —     |         | 11・70・125                        |
| 112 | 殿林     | 明宝町殿林         | I -3 ? | (丸頭 2)     | —     | —   | —    | —    | —     | —       | 70・84・125                        |
| 113 | (小駄良原) | 八幡町小駄良原       | I -1   | 丸頭 2(石斧 2) | 130   | —   | 46   | —    | 流紋岩   | 郡上八幡博覧館 | 126                              |
| 114 | (方須)   | 和良村方須         | I -3   | 丸頭 2       | 97    | —   | 59   | 43   | 濃飛流紋岩 |         | 83・84・102・125                    |

## 5,個々の独鈷石解説

- 高山市上野（うわの）町出土とされる資料で、1987 年の集成（文献 62）の№.64 と同一であると判断した。文献 13 に「平田平右ヱ門、大形 1」、江馬修所蔵写真（高山市郷土館蔵）の中に「平田平右ヱ門蔵独鈷石、上野町出土、長 20.5cm」とあり、大正か昭和初期の発見であろう。図は写真から作図したが、左右非対称の稀少な例である。『地名表』にも上野町垣内とあり、この資料を指すものとしてよからう。
- 高山市塩屋町の臼元（うすもと）サゲン洞発見とされ、晩期の土器も発見されている。左右ヱ門洞とも表記する。やや寸詰まりのⅡ -1 類で鏝は少し片寄るが極端ではない。にびい刃部を備えるが潰れている。
- 同じくサゲン洞出土であるが発見者は異なる。弯曲度の強いⅡ -1 類で凹部に敲打痕が残るが身部はよく研磨される。両端を欠失するが完形ならば刃部を有するかなりの優品であろう。
- 江名子町出土とされ、恐らく泉水・保木遺跡あたりが候補としてあげられる。緑色片岩製は少ない。少し反りをみせ刃部を備える。全体に良く研磨され重量は 170 g である。所有者のコレクションには御物石器・石冠・石棒・有舌尖頭器など多数があったが、今は散逸した。
- 同一の発見・所有になるもので、丸頭型であるが挟り部が深い。黒色の安山岩製で表面はザラザラと多孔質である。240 g
- 高山市郷土館に所蔵される犬塚行蔵コレクションの 1 つで、県重要文化財に指定される。日枝神社境内発見となっているが、縄文遺跡としての認定は無い。やや偏平なⅡ -1 類で鏝はやや片側が突出する。
- 高山市滝町在住の洞口和吉コレクションの一つ。敲打痕の残る粗い加工度で、底面は平坦に作られ据置き可能なタイプである。
- 古川市の村坂又平コレクション中にあるものを実見した。図・写真はないがⅠ -3 類の安山岩製である。
- 文献 65 で報告されたもので、棒状礫を使用し加工は上半部の一部にのみ行われ、敲打によって 2 つの突起を作出している。未製品の可能性もある。底面は少し斜めに傾き、平置出来ない。刃部はなく、槌状である。
- 海拔 780 m の高山市中之切遺跡より、昭和 50 年代に土地改良事業によって発見された。後期の土器も伴っている。緑色片岩製で火熱を受けて赤褐色に変色している。全体を敲打で仕上げ、挟りの部分及び身部の一部に研磨痕がみられる。両端はにびい刃状を呈し左端が少し潰れて使用の痕跡がある。断面は楕円形、重量 323 g を量る（文献 111）。
- 昭和 60 年頃、高山市石浦町内に所有者がいたとの情報があるのみでタイプ不明。
- 12.13.14. 一之宮町には 4 点の独鈷石の出土が記録されるが、実在するのは 15 の 1 点のみで、この 3 点は文献上のものである。『地名表』には 12・13、旧村史（文献 35）には 12・14 が記載され、13・14 が同一資料である可能性が高い。問坂上（とつさかうえ）は青木遺跡として新村史（文献 110）に後期土器や石棒が記載される。
- 同町日影出土。旧村史に「日影の老農山際久六が掘り出し、明治 30 年高山市神通寺の所有に帰した。長さ 14.8cm、重さ 315 g、石質は閃緑岩である。銅剣にみられるような稜をもつ。金属器の影響が認められるとすれば、もはや縄文式のものとはいえないであろう」と記される。全体がよく研磨され刃部も鋭い。断面は挟り部分は楕円形、身部は亀甲形を呈する。
- 清見町の上岩野出土。村誌（1976 年）に記載がある（文献 43）。鏝は無いが平置可能で頭部は槌状である。遺跡は 2005 年に発掘調査され、住居址 76 軒が検出された拠点集落である。中期後半から後期前半を主体とし、石棒等多数の遺物が出土している。
- 個人所蔵の未発表資料で、Ⅰ -3 類の丸頭型である。挟り部のみ敲打で作出し頭部には使用の痕跡がある。岩田勲氏教示。

18. 林報告（文献 21）及び村誌に記載がある。「長さ 5 寸 2 分、巾狭き所にて 1 寸 4 分 5 厘、広き所に  
て 2 寸 5 分、厚さは 1 寸 6 分より 8 分位あり。砂  
岩製の石を磨きて作り、その形状は普通の石斧に以  
て中央の断面長方形に近しいといえども、（イ）の所は  
柄を付けるに都合よく凹みたるは 3 図（1）の石槌  
の如し。比の如く柄を付けるに都合よき所ある石斧  
は未だ外に其例を見ず」とあり、簡略な図が示され  
る。有溝石斧と考えられる（第 10 図石）。



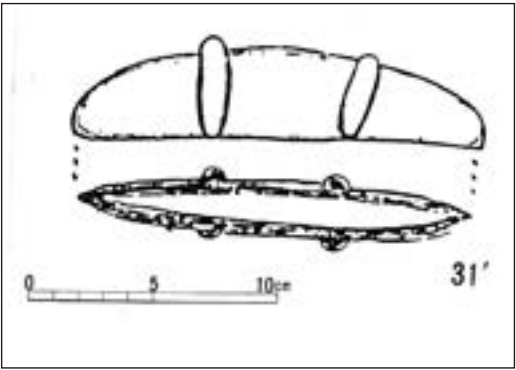
第10図 林(文献21)によるI-3類独鈷石と(19)と有溝石斧(18)

19. 同時に報告されたもので刃部はなく、上下非対称の  
I -3 類と思われる。「長さ 5 寸 7 分、頭部の径 1 寸  
8 分、下部の径 8 分 5 厘ある杵（きね）形の石を上  
下共に物を以て打ち叩きたるが如き痕跡ありて、頭  
部に近き所に巾約 1 寸程を打ち叩き廻らし、恰も此  
処に柄を結び付けるに都合よくなしたる石槌とも云  
うべき者 1 個を発見せり」と記録される（第 10 図左）。
20. 高山市丹生川町出土の神通寺所蔵品の 1 点で、『県史』・村史(文献 78)では旗鉾とされるが、資料には「旗  
鉾大名古」の記入がある。大名子遺跡出土とすれば、旗鉾遺跡から少し離れた海拔 1030 m での出土  
となる。黒色で全体がよく研磨されツヤがある。刃も鋭い。岡本による「扁平な白川型石斧」として  
の認識もある（文献 105）。
21. 同町旗鉾の月出（つきだし）遺跡出土品。両端を欠失するが刃部を形成していたと思われる。鏑が上  
方に片寄る特異な形状を持ち、角に挟りが入る事から石斧 7 類とされよう。底面は丸く、全体に良く  
研磨されている優品である。
22. 林報告が初出である（文献 12）。「黒褐色を帯ぶる光沢のある石にて作り、好く磨きて美麗なるものに  
して長さ 5 寸 2 分、中央幅 1 寸 2 分、中央厚さ 6 分ありて、飛騨発見独鈷石中の精巧なるものにし  
て発見地は大野丹生川村板殿（いたんど）なり」とある。多賀（文献 22）では写真のみあり、両頭石  
斧としているので刃部を備えるかも知れない(第 4 図上)。図は写真から採ったと思われ(『どっこいし』  
14 号表紙 1983 年)、実物の所在は不明である。
23. 『地名表』初出で、加藤輝次の野帳に実大のスケッチがある。平成 3 年に田口寛彦氏宅で実見。明治頃  
祖父豊氏により現在の丹生川中学校あたりで発見されたという。当地は尾崎城城下町の伝承がある。  
全体に研磨されツヤがある。刃部は鋭利で使用痕はなく、側面は若干弯曲する。
24. 高山市郷土館蔵の加藤輝次コレクションの 1 つで、自然石に敲打を加え I-2 類の槌状頭部をなす。断  
面は長方形で丸頭型とは少し異なる。480g。
25. 『地名表』初出。『図解考古学辞典』（文献 29）に図があるが出典不明。国府町宇津江巾資料（No. 39）  
に非常によく似ているのでⅢ -3 類とした。
26. 牛垣内遺跡発掘資料（文献 85）。縦位の半欠品であるが、全面を敲打で仕上げ両端部は研磨されてい  
るので全長が知られる。丸頭 2 形と判断される。遺跡からは環状石斧・石棒等も出土している。報告  
書写真転載。
27. 昭和 34 年(1959 年)の土地改良事業で出土。石刀・御物石器・石冠も伴っている。ひょうたん形をなし、  
加工は凹部に最小限行われ非対称をなす。
28. カクシクレ遺跡発掘資料（文献 80）。A 地点包含層出土で晩期土器・石剣を伴っている。全体に敲打  
で仕上げられる。報告書写真転載。

29. 田中正太郎報告（文献 7）初出の、文献のみの資料である。文献によっては沖垣内（おきがいと）(『地  
名表』・多賀 22)、渚(『目録』・『県史』)、奥垣内（おくがいと）(『遺跡地図』1976 年)と異なった  
地名となっている。

30. 林報告に「中央の横断面、三味線胴形をなす。磨製石斧に以て長さ 7 寸 8 分、頭部幅 1 寸、刃部幅 1  
寸 7 分、厚さ約 1 寸 2 分あり。四ヶ所に少し高くして帯を巻たるが如き彫刻あり。斯くの如き石器は  
外に発見の例あるを聞かず。砂岩質の石なり」と記される（文献 17）。両端に磨製石斧様の刃部を備  
えるが大きさが異なる。帯状の隆帯が 4 本あり中央に浅い挟りが巡る。長さ 24.2cm は最大のものであ  
る。筆者は特殊型に分類したが、山岸は非対称型の独鈷石 I 型（文献 75）、岡本は両頭石斧の仲間と  
して独鈷石の起源にかかわる石器としている（文献 90）。

31. 同じく林報告に「石原は岩畑より 5.6 丁南にして地形は岩畑に似たり。数年前に山上某氏の家屋新築  
の為に土を取りたるに深さ 2 尺程は黒土地にして其  
下に 2 尺程赤土あり、此の黒土と赤土の境界に近き  
黒土中より長さ 5 寸 3 分ある砂岩質の独鈷石 1 個を  
発見せり。又其近傍にて石鏃を発見する事もありと  
言う。」とある(文献 17、第 11 図)。平成 13 年 7 月、  
山上家にて実見。全体に暗い黒色を呈し完全に研磨  
される。鏑は上部に突出しその断面は台形をなす。  
底面は平坦に磨かれるが約 3 mm 内弯し、平置する  
ことは出来ない。中央くびれ部に若干の黒い皮膜が  
残る（文献 99）。なお『県史』では両頭磨製石斧と  
している。



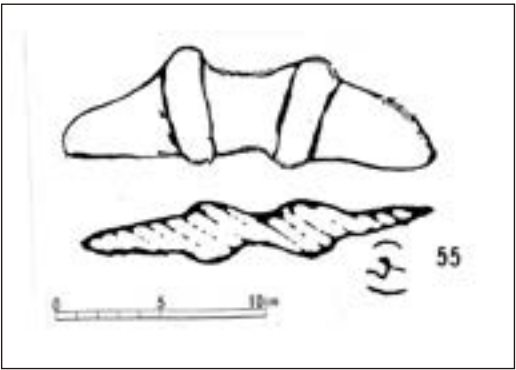
第11図 林(文献17)にあるスケッチ

32. 『朝日村誌』（1956 年）に写真があり、『目録』・『県史』では両頭磨製石斧として扱われている。現在  
堂之上（そら）考古資料館に展示され、角竹喜登鑑定書が添えられている。全体に研磨されやや薄手  
である。両端を破損するが残る刃部断面はレンズ状でエッジはシャープである。台形の鏑がしっかりと  
巡る。なお出土地とされる段保（たんぼ）は下位段丘にあり、段丘上に釜野遺跡がある。遺物が多  
数出土しているのは後者である。
33. 前橋遺跡発掘資料（文献 66）。後・晩期土器や石棒・石冠などが出土している。球頭状を呈し、粗雑  
なつくりである。
34. 平成 6 年の発掘調査の少し前に林雅一氏によって発見されたもので、全体を敲打で整形した後、中央  
くびれ部分を滑らかに研磨している。くびれ部の断面は楕円形をなし、他の部分はやや扁平である。  
側面は定角石斧のような面取りがみられ、上下端とも刃部をなさず使用によると思われる漬れが著し  
い。両頭の石斧として実際に使用されたときみなされるものである。山岸は製作途上の未製品として扱  
うが（文献 91）、全長 13.6 cm からみても極く小型のものしか作れないであろう。
35. 旧岩佐善珠コレクションの所有者の蔵品で黒光りし、伝世品の観がある。昭和 61 年の高山市郷土館  
縄文展に出品された。
36. 文献のみの資料で、古くは 1893 年に田中正太郎によって報告（文献 6）されて以来、多くの文献に  
登場する。タイプ不明。なお遺跡地の国府町上ノ段はエンダソラと同一遺跡である。
37. 『地名表』初出。タイプ不明。大畑は上ノ段の西方 300 m の丘陵上にあり、後期土器・石刀・石剣・  
石皿等が発見されている。
38. 平成 7 年の土地改良事業後に表採された資料。砂岩製の磨製石斧の中央に浅い溝が巡る有溝石斧であ  
り、刃部は下部のみで頂部は欠失するが尖り気味に丸みを帯びるものと思われる。重量は 470 g あり、

かなり重い部類である。全体に敲打で仕上げた後、丁寧な研磨が施されて滑らかであり、両側面に少し敲打痕が残る程度である。挟りの部分もよく磨かれる。刃部は使用によると思われる破損と消耗で鈍い刃となっている。アワラ遺跡は低位段丘の水田地帯にあり、磨製石斧・大珠・石冠・太型蛤刃石斧等が発見されている（文献 121）。上原真昭氏教示。

39. 国府町宇津江出土の村坂コレクション資料である。良く磨かれ底面は平坦で据置タイプである。県博特別展に 2 度出品されている（文献 44・45）が、写真が取り違えられている。即ち文献 44 の宇津江とされる資料は神岡町数河（すごう）資料、文献 55 の杉原とされる資料が宇津江資料である。また № 25 の折敷地資料にも大変よく似ており、同一資料の可能性もある。
40. 鍰が一方に片寄るタイプで、3 分の 2 を欠失するが重量感のある閃緑岩製である。断面はレンズ状で刃部は鋭かったと思われる（文献 74）。
- 41.42 荒城神社に収蔵される考古遺物で、昭和 7 年の神社本殿修理基礎工事の際に出土したものが多くあり、Ⅰ－3 類の独鈷石も 2 点ふくまれる。いずれも丸頭をなし、41 は形状がより整っている。収蔵品には御物石器・石棒・石冠・三頭石斧・石皿等がみられる。
43. 片側に鍰が片寄るⅡ -2 類であり、断面は下ぶくれの楕円形で刃部を備える。
44. 荒城神社遺跡発掘資料（文献 71）。蛇紋岩製は珍しく、表面は滑らかである。重量は 516 g、左右非対称となっている。報告書写真転載。
45. 低い鍰がほぼ一周するもので、推定長 22.3cm の大型品である。全体に研磨されるがややザラつく。刃部はかなり鋭く、反対側の折損部には敲打で再加工した痕跡がある。底面は敲打痕が残るが比較的平坦に作られ、据置も可能のようである（文献 112）。
46. 立石遺跡発掘資料（文献 73）。浮線網状文・石冠・石刀・土偶などと共に出土している。打製品として特殊型に編入したが、扁平な独鈷石として多頭石斧への変遷形と考える論考（文献 105）もある。時期的には終末期の一形態であろう。砂岩製、500 g。
47. 国府町上広瀬での 1960 年代の土地改良時の発見による。半リング状に鍰が片寄り、少し反りをみせる。よく磨かれて黒光りしている。刃部を欠くが鋭かったと思われる（文献 108）。安城寺遺跡では後期加曽利 B 式～安行寺系沈線文土器が出土している（文献 116）。
48. 上宝町蔵柱上野遺跡の発見で『上宝村の先史時代』（文献 27）初出。3 分の 1 を欠失するが全体滑らかに研磨され、結晶の部分だけあばた状になっている。刃はにびい。
49. 文献のみでタイプ不明。『地名表』に蔵柱として独鈷石が記載される。『目録』では蔵柱下垣内として両頭石斧が、『県史』では独鈷石と両頭石斧が併記される。林の調査（文献 20）では独鈷石は行方不明とある。
50. 蔵柱の学校に保管されていたもので、現在ふるさと歴史館に展示される。遺跡名はわからないが、蔵柱には 4 ヶ所の縄文遺跡がある。Ⅰ -3 類で特に使用の痕跡はない。重さ 470 g（文献 107）
51. 文献 27 に図がある。端正な分銅形で断面は円形である。宮原地内では石剣・石刀・硬玉製大珠などが発見されている。
52. 高山市郷土館の加藤コレクションに含まれるもので、鍰がリング状に巡るⅡ -1 類である。刃部はよく残る。本郷は発達した 4 段の河岸段丘最上面にあり、在家・内野・宮ノ前等の縄文遺跡が存在する。
53. 飛騨民族考古館にある資料で「昭和 42 年 12 月 2 日、若下吉之助より貰受ける」の解説がある。鍰は片方に強く突出し丸みを帯びる。刃はにびい。桂本神社遺跡も本郷面に立地する。
54. 『千代の鏡』にも掲載される優品。神通寺の文献 9 に「明治 8 年吉城郡高原郷平田由三郎発掘、吉城郡英充成氏採集久珍蔵、明治 41 年夏日帰拙蔵」と記される。ほぼ直線的で刃もよく残る。重さ 300 g。据置可能タイプである。

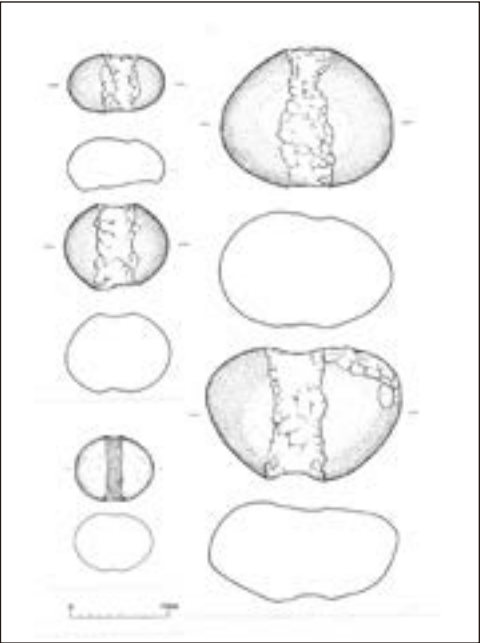
55. 林報告（文献 12）に「砂岩製。長 6 寸 2 分中央にて巾 1 寸 5 分厚さ中央にて 7 分 5 厘、発見地は吉城郡小鷹利村字黒内にして其形状は第 2 図（4）の如し」として稚拙な図が示されている（第 12 図）。おおよその形は把握できる。№ 58 の資料にもよく似ているが、厚みの薄い点で別のものと判断した。現在飛騨市 古川町。



第12図 林(文献12)による黒内五ヶの独鈷石(55)

56. 『千代の鏡』に石小刀として「出所細江村太江組 吉城郡古川町鈴木泰庵氏蔵」とあるが所在不明。長さ是他図と比較して推定した（第 3 図 № 56）
57. 同じく石分銅として「出所小鷹利村高野組、塚越源造氏蔵」とある。挟りは深く側面はやや平たくなっている。所在不明（第 3 図 № 57）。
58. 古川町の村坂コレクションにある。鍰が一方に片寄る。加工はやや粗めで断面は厚みがあり刃にもびい。県博特別展にも 2 度出品されている。
59. 文献のみの資料で 1970 年の土田報告（文献 38）に独鈷石として「長さ 12cm 余、節状の突出部は低い、刃なし」とあり、鍰が浅く刃がない点で丸頭 3 形と判断される。
60. 中野山越遺跡のすぐ下の住民による発見で、左右が少し異なるⅠ -3 類である。
61. 同じく遺跡に近い住民の発見で、平成 4 年 11 月実見。全体を敲打で整え、両端は少し尖り気味である。特に使用の痕跡はみられない（文献 74）。
62. 半欠品であるが鍰が全周し直線タイプのⅡ -1 類である。刃はあるがややにびい。花崗岩製は比較的珍しい。
63. 林報告（文献 12）に「其の他、長 5 寸 5 分径 1 寸 8 分程の円き棒状の自然石の両端を打ち叩きたるが如き痕跡あるものを、吉城郡細江村大字数河より発見せり」とあるのみで図示はないが、Ⅰ -3 類と思われる。
64. 田中正太郎の 1892 年の報告（文献 5）に「角川（つのがわ）の柏木氏蔵、仮称鶯（とび）口石器、淡青色」としてこの図がある。上下面に線刻のある特殊な例で、先端は刃をなしている様にみえる。岡山準の「羽根・石鈷」の報文（文献 127）もこの資料を指すのかも知れない。現在飛騨市河合町。
65. 『千代の鏡』に「石小刀 出所河合村 岩佐善珠氏蔵」として掲載されるもの。鍰が上方に片寄るタイプで据置可能である。刃部は鋭い。岩佐コレクションは現在の高山市の個人宅に全て収蔵されている。
66. 松井朗による報告（文献 82）がある。坂井氏による西沼遺跡（羽根遺跡）の発見で、著名なバナナ形石器や石冠が出土している小鳥川流域の代表的な遺跡である。全体を敲打による調整と荒い研磨で仕上げ、特に凹み部は良く研磨されている。両頭部は半球形で槌状に丸みを帯び、ほぼ対称形である。使用の痕跡は特に認められない。重量 575 g。
67. 藤井貞幹『集古図』（文献 2）に登場し、文献 14・24 でも紹介される。文献の古さとしては木内石亭の『雲根志』後編四、十四（1773 年）に登場する白川村出土の 2 個の独鈷石の記録に次ぐものである。「石器、飛騨国白川郷天生（あもう）村駄畝所出」とあるから、現在の河合町天生地区内での出土であろう。図を見ると、寸法は定かではないが細長い石剣状の身部に、一方に片寄って 2 個の鍰があり、少なくとも一端に刃部を備えている。下の図との関係は分らないが別の個体と考えここでは触れないでおく。図に見る限り完形の独鈷石であり、しかも飛騨地方に類例の少ない非対称型独鈷石である（第 2 図）。
68. 神通寺コレクションに含まれるもので「吉城郡舟津町字跡津川 森正木採」とある（文献 9）。鍰はほとんどなく、Ⅰ -1 類とした。厚みは比較的薄く半月状である。刃部も備わる。

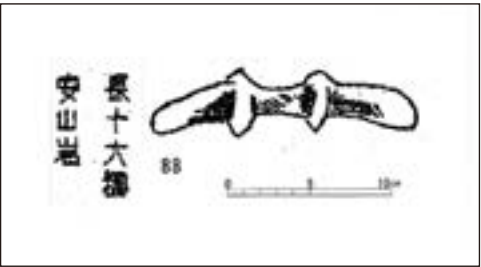
69. 神通寺朝戸高山所蔵石器図(文献9)に登場するが、現在の所有者は異なっている。左右非対称に近く、据置可能型である。文献44の国府町宇津江とされる写真は、本資料のまちがいである。
70. 『千代の鏡』に「石小刀 出所古城郡神岡村 家蔵」とあり、佐藤泰郷の所蔵であった。加藤文献(文献13)「佐藤氏旧蔵」とあるのは大正6年にコレクションが散逸したことを示す。左右がやや非対称となっている(第3図 No.70)。なお奈良の丹波市町本田氏に譲渡される際の記念写真には、この資料の他に2点の独鈷石(I-3類・II-2類?)が写っており、飛驒出土品の可能性がある(松井朗氏教示)。
71. 二木長嘯『神代石図』(1790年頃)に描かれ(文献3)、『千代の鏡』にも二木長右エ門所蔵として「石小刀 出所古城郡坂下村杉原組」とある。長さ21.4cmの優品で美しく研磨され、反りが強く刃部を備える。凹部に少しく敲打痕を残す。現在飛驒市宮川町。
72. 宮川町の坂下小学校に保管される資料で、鏑がリング状に全周する、71・86と同じタイプである。3つに折れ、1ヶ所接合しているがその経緯は不明である。
73. 『宮川村誌』に載る資料で、反りのあるII-1類。にぶい刃が備わると思われる。加工はやや粗い(文献51)。
74. 『地名表』初出。高山市郷土館の加藤コレクションの1つ。全体に研磨されるが中央部に敲打痕が残る。鏑は上部に片寄り反りが強い。刃部の上下に線刻が入り、64の資料と共通している。底面は複雑に加工され、据置可能となっている。
75. 『千代の鏡』に「石分銅 出所坂下村塩屋組 金清社神宝」とあり『地名表』にも出てくる。左右対称の整った形をなし大型である。多孔質の図から火成岩系であろう(第3図 No.75)。
76. 富山市の考古資料館に収蔵される『栗山コレクション目録』中にある(文献61)。飛驒の発見の資料も多く含まれ、本遺跡では御物石器も伴っている。ただし写真にある御物石器は笹津資料と入れ違っている事が判明した(文献132正誤表)。独鈷石は両端の尖るI-3類で写真のみが示される(目録写真転載)。
77. 金清神社遺跡発掘資料(文献92)。金清神社B地点第Ⅳ層(縄文後期後葉～晩期前葉)より出土している。II-2類であるが若干左右非対称となるようである。淡緑色凝灰岩製。刃部の状態は不明。
78. 家ノ下遺跡第1次発掘調査時に出土(文献81)。片岩製の扁平な素材を用い、弯曲した上部に1対の突起が作り出される。岡本は扁平な独鈷石に分類する(文献105)が、省略形ともみなされる。
79. 同じく家ノ下遺跡の出土品である(文献81)が、報告書では有溝石錘として扱われ他に6点の資料が認められる(第13図)。本資料は全体を敲打で仕上げている点で最もI-3類に近い資料であるが、他は自然石に抉り部のみ敲打を加えており、判断に迷うものである。重量600g。報告書写真転載。
80. 宮ノ前遺跡前田地点発掘資料(文献86)。定角石斧に溝が巡るといった感じで、報告書には「中央部がくびれ帯状にえぐられたようになっている。断面は楕円形で両頭部はやや角張った半球状を呈している。研磨痕が観察できるが整形時の敲打痕も多く残っている」とある。石材が蛇紋岩という点でも異質であるが、刃部を持たない事からI-2類に分類した。重量517g(文献121)。
81. 同じく宮ノ前遺跡の平成6年度発掘調査で出土した(文献96)。「楕円形の平たい円礫を素材とし、中央部に抉りを設けて分銅形をなす」と記される。I-3類のやや扁平なタイプで、加工の度合いから



第13図 家ノ下遺跡の有溝石錘(文献81)

簡略化されたものの様に思われる。本遺跡では石棒・石刀・石冠・御物石器・十字形石器など多彩な石製品が出土している。重量621g。報告書写真転載。

82. 同じく宮ノ前遺跡の平成12年度発掘調査で出土した(文献103)。報告書では有溝石錘とされる。やや左右対称ではない。580g。報告書写真転載。
83. 神通寺朝戸高山蒐集品の1つで「益田郡竹原村小字三ッ岩」とあり、下呂市乗政の三ッ石遺跡と思われる。かなり大型で抉りも深い。
84. 1929年の犬塚行蔵報告(文献10)の写真中に見られる。桜洞縣神社神宝の1つで平成20年10月のご開帳の際に実見した(文献124)。中央部隆起はごくわずかで帯にはなっていない。刃にはにぶいがI-1類に分類した。使用痕と思われる傷が一端にある。
85. 文献のみの資料。『地名表』などに記録されるが『目録』にはない。多賀(文献22)では「独鈷石類似」とあることから実見したのであろう。
86. 高山市の小森家に伝わる津野滄洲コレクションの1つで、国指定重要文化財に指定されている。文献62で初めて紹介された。ラベルに「神代太刀 益田尾崎出」とある。台形の鏑がしっかりと巡るタイプで反りが強く刃は鋭い。白色の砂岩製で美しく磨かれている。『雲根志』にある白河出土の「白色なる」ものではないかと筆者は考えている(文献133)。
87. 下呂市馬瀬黒石の牧戸氏所蔵。I-3類でやや細長い。わずかに左右非対称である。砂岩礫使用。
88. 中切中学校元校長の池本鉦三氏が村史編纂のため集めた資料中にあり、「安山岩長16cm」と簡略な図が残る(第14図)。村史は氏の急逝により中断し、未完原稿がガリ版刷でおこされて一部の人に所蔵される。実物を見た事のある中川鏑一氏談によると、たいへん形の良い滑らかのものであり、昭和34年頃まで存在したが昭和53年時にはなかったとのことである。IIないしⅢ型1類であろうか。
89. 大江命(まさる)『飛驒の考古学Ⅰ』(文献33)の小坂町南垣内遺跡の項の図中にある資料で、解説はないがI-1類の独鈷石と考えられる。恐らく打製であろう。断面は三角形を呈する。大江コレクションは福応寺に収蔵される。
90. 大野郡白川村の御母衣上洞(みぼろかんぼら)に出土と『県史』に記されるが、新旧村史に記載はなく『荘白川総合学術調査』(文献26)が出典と思われるが、確認していない。『地名表』には石鏃・磨製石斧・石皿・勾玉・土器が記録され、後に石匙・石槍・石冠などが加わっている。
91. 白川村荻町の明善寺に石皿とともに所蔵されていた資料で、『県史』に写真のみ出ている。II-1類で低い鏑が全周する。刃にはにぶいと思われる。
92. 昭和56年の島巾通り遺跡発掘調査における出土資料(文献53)。I-3類であるが断面形は三角状である。全体に粗く剥離・敲打される。石材は粘板岩がホルンフェルス化したものである。北陸系晩期土器・御物石器・石冠が伴出している。
93. 『雲根志』に記される黒色のもの。「研究のあゆみ」参照。長さ8寸(24.3cm)とあるが、文献131では4分の1を欠失した、より正確な図があって長さ4寸(12.1cm、推定長16cm)とされるので、そちらを採りたい。
94. 同じく『雲根志』記載の白色のもの。「研究のあゆみ」参照。長さも信頼出来ない。鏑がしっかりと巡る様子がわかり、86の尾崎出土品である可能性を秘めている。



第14図 『私本馬瀬村史』にある独鈷石の図

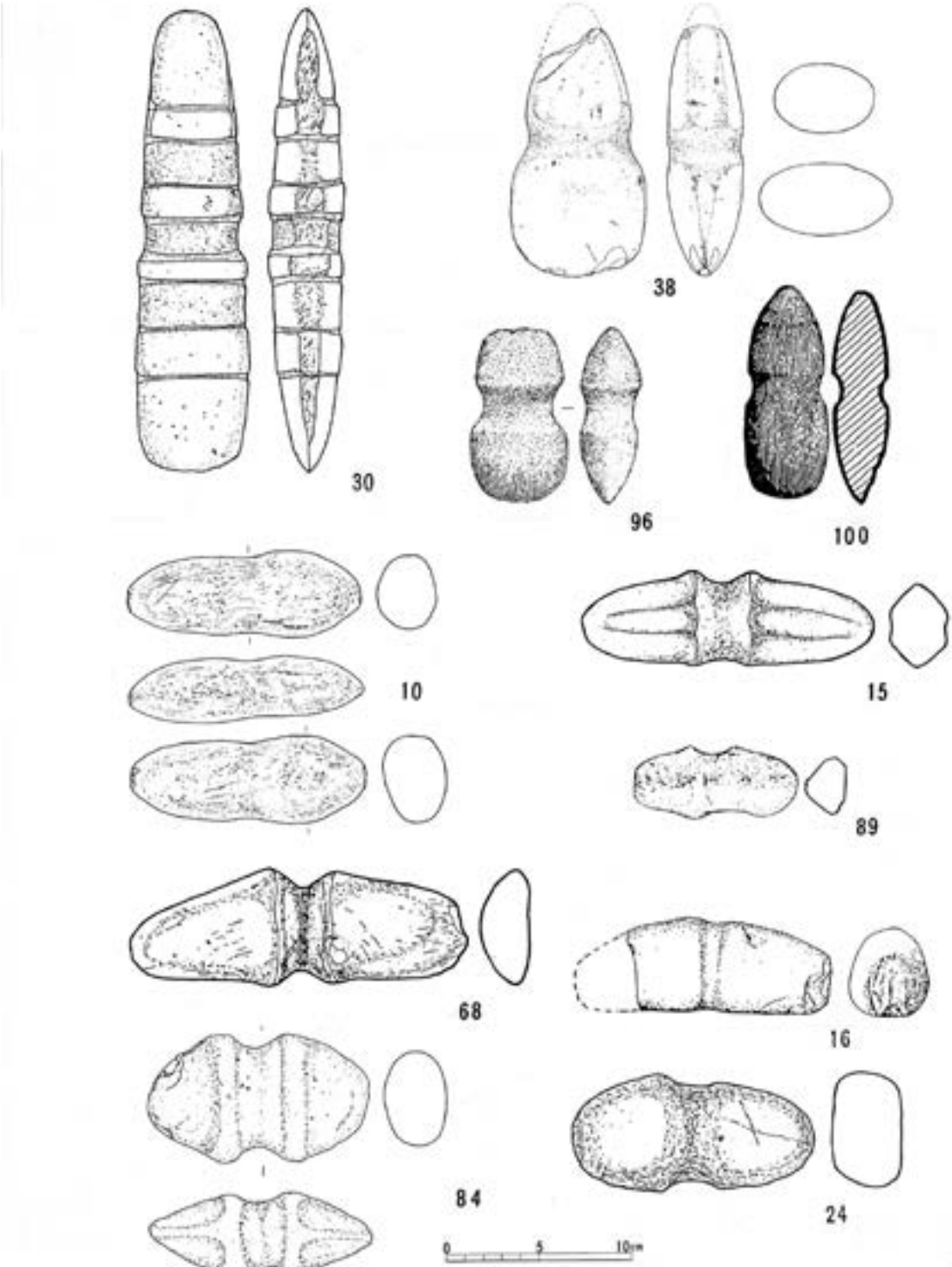
95. これより美濃出土品の解説に入る。
- 『恵那郡史』に「寛政年間、当時瀬戸村庄屋後藤助右衛門が松葉平で山林開墾の際に発掘した」とあり、山本栄一が独鈷石であると報告したとされる（文献 37）。小川栄一文献（文献 23）にも出てくると思われるが確認していない。図によればⅢ -1 類で少し反りをみせる。かなり薄手で刃部も備えるが、法量は不明。
96. 『中津川市史』に掲載される有溝石斧で、出典は山本栄一『恵那郡の石器時代』（昭 10）か小川栄一『美濃の石器時代文化』（昭 27）と思われるが、確認していない。一方の刃がややにぶくⅠ -1 類に近い有溝石斧である。図は文献 37 による。
- 97.98.99. 中津川市久須田遺跡の発掘資料（文献 67）。3 点のⅠ -3 類独鈷石が出土しており、それぞれ形態を異にしている。97.99 は先端がやや光り、99 には研磨痕も残る。98 は円礫に浅い敲打の溝を巡らせ、頭部は槌状である。遺跡は後期から晩期にかけての遺物を主体とし、石棒や石冠も出土している。
100. 『東海の先史遺跡』（文献 32）に紹介され、後に『県史』や報告書（文献 52）にも掲載される著名な資料である。頭部が槌状に尖る有溝石斧で刃は鋭い。遺跡は後期土器を主体に石棒・石刀・御物石器・四頭石斧などが出土している。
101. 『恵那市史』（文献 54）に「昭和 6 年ここで開墾中、表土下 2 m のところから出土した」とある。全面を敲打によって整形し、両端の刃部は局部的に磨かれて鋭い。数条の擦痕も認められる。浅い鍰が全周するⅡ -1 類であるが、上面が多少弯曲している。
102. 美濃加茂市南野遺跡発掘資料（文献 46）。Ⅰ -3 類でかなり小型である。左右非対称で、円礫を素材としていると思われる。
- 103・104. 可児市土田の北裏遺跡発掘資料（文献 41）。ともに大型のⅠ -3 類で、104 は 908 g もある。長い自然礫を素材とし、中央部に敲打の溝が浅く巡る。103 は溝がやや深く、全面が磨かれている。670 g。
105. 『富加町史』（文献 45）及び沢田報告（文献 118）がある。Ⅱ -1 類に該当し、鍰状凸帯の断面は三角形で全面がよく研磨されている。斧状部は面を取り定角式となる。「字車塚ヨリ」の記入がある。
106. 同じく両文献にある。Ⅲ -1 類に該当し、凸帯断面は台形、弯曲度が強い。ほぼ全面研磨される。「富加村夕田（ゆうだ）発見」の記入がある。
107. 県博物館展示のレプリカで存在を知った。沢田報告（文献 119）によると、中之保若栗遺跡出土品で富之保の生涯学習センターに展示されている。Ⅲ型の均整のとれた美しい独鈷石である。底面に刻みがあって立てて置く事ができることからⅢ -3 類に分類した。先端は少し欠損するが一部に再加工がみられるという。なお文献 44 では出土地が武儀町岩井戸となっている他、文献 59 の写真中にも登場してくる。沢田文献写真使用。
108. 小川文献（文献 23）や『県史』及び文献 125 に出土が記載されるが形状不明。107 の資料の発見地と極めて近接することから、同一資料とも考えられる。
109. 沢田報告（文献 100）がある。要約すると、平成 8 年 2 月の発見で遺跡地とされていない十四条（じゅうしじょう）において民家の浄化槽工事の際に出土したという。自然堤防上に立地する。小型で軽量（192 g）であるが、きわめて均整のとれた優品である。ほぼ全面が研磨され滑らかとなっている。鍰が全周するⅡ -1 類で、先端部はツルハン状となり少し潰れる。岡本による尖頭 5 形に属しよう。
110. 林報告（文献 18）に初出し、大参（文献 36）で詳述される。『県史』には多数の遺物が写真で紹介されており、本資料ともう 1 点の有溝石錘？がある。平成 14 年 3 月実見・測図。粗い敲打でやや深い溝が作られる。
111. 林報告（文献 11）に奥明方（みょうがた）村小川森下として本資料が写真で紹介されるが、『明宝村史』

- （文献 70）には明宝村森本とある。両端が尖るⅠ -3 類である。図は写真より作図した。
112. 文献 70 の他、『大和村史』（文献 84）に「明方村小川地区からも 2 点の独鈷石が出土しているが刻文がない」とあり、111 と同様のⅠ -3 類と思われる。
113. 郡上八幡博覧館に展示される資料。小駄良原（こだらはら）出土。図は写真よりの作製である。長円形の流紋岩礫の中央に浅い溝が巡り、断面は楕円形で両端ににぶい刃を備える。一方に使用痕と思われる欠損がある。
114. 『和良村の文化財』第 3 集（文献 83）に詳しく解説される他、沢田の報告（文献 102）もある。文献によって方須（ほうす）と古田垣内（こだがいつ）の両者が出土地とされる。沢田によれば、本来研磨品が耕作によって欠損したとされる。裏面がやや平坦に形成され、両端は少し尖る。2 条の線刻が巡り、リング状凸帯の省略的表現とみなしている。

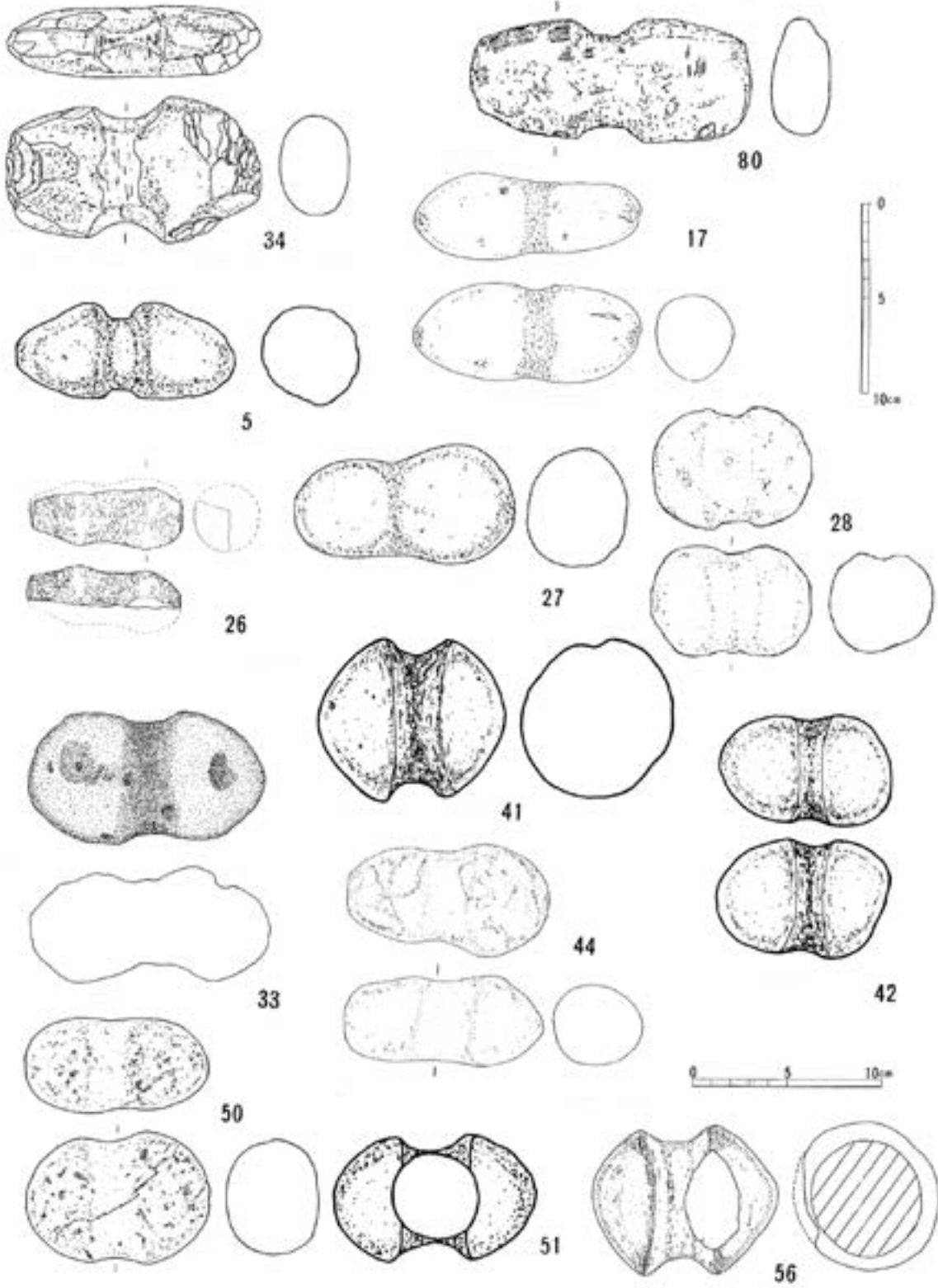
第2表

岐阜県の独鈷石集成表

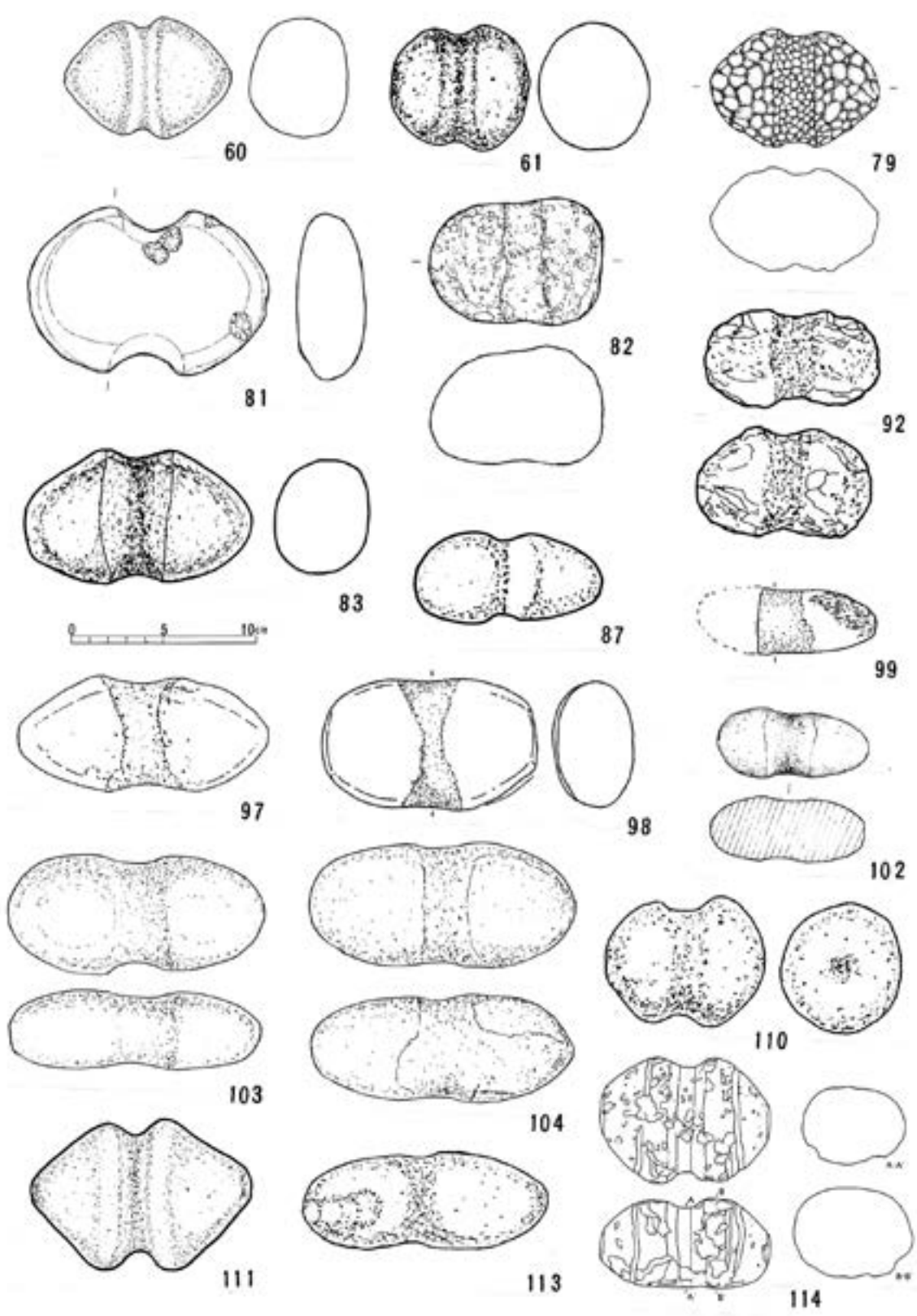
|               |     |          |    |     |              |
|---------------|-----|----------|----|-----|--------------|
| Ⅰ 型           | 1 類 | 隆起なし・石斧状 | 6  | 47  | (地点判明)<br>47 |
|               | 2 類 | 隆起なし・槌状  | 4  |     |              |
|               | 3 類 | 両頭部 丸頭   | 37 |     |              |
| Ⅱ 型           | 1 類 | 丸み隆帯全周   | 19 | 32  | 30           |
|               | 2 類 | 隆帯一方に偏る  | 7  |     |              |
|               | 3 類 | 平置可能型    | 4  |     |              |
|               | 4 類 | 非対称型     | 2  |     |              |
| Ⅲ 型           | 1 類 | 隆帯角張る全周  | 9  | 17  | 16           |
|               | 2 類 | 隆帯一方に偏る  | 2  |     |              |
|               | 3 類 | 平置可能型    | 6  |     |              |
| 有溝石斧・ミニチュア・特殊 |     |          |    | 7   | 7            |
| 小計            |     |          |    | 103 | 100          |
| 型式不明          |     |          |    | 11  |              |
| 地点不明          |     |          |    |     | 14           |
| 計             |     |          |    | 114 | 114          |



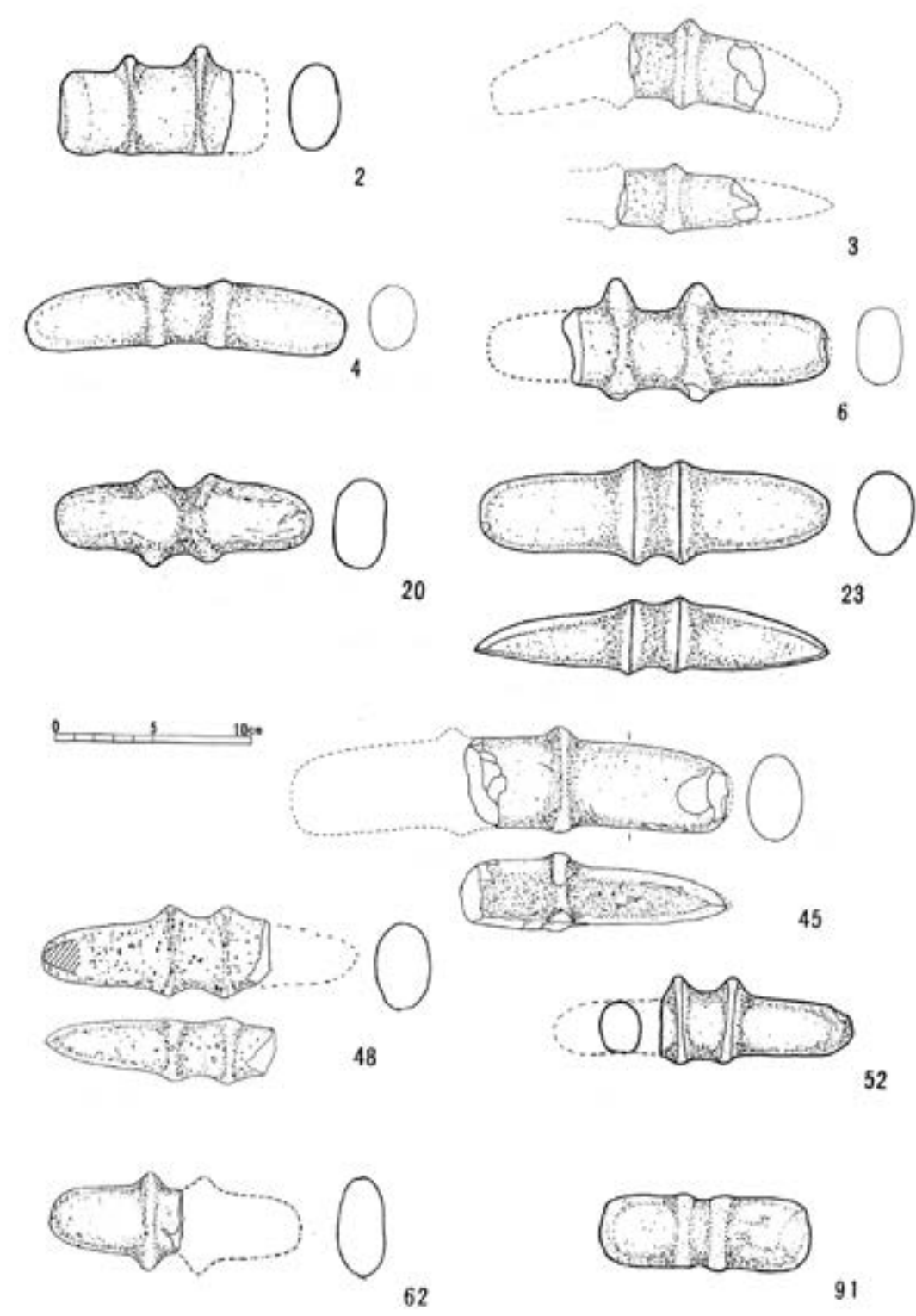
岐阜県の独鈷石 集成図版 1



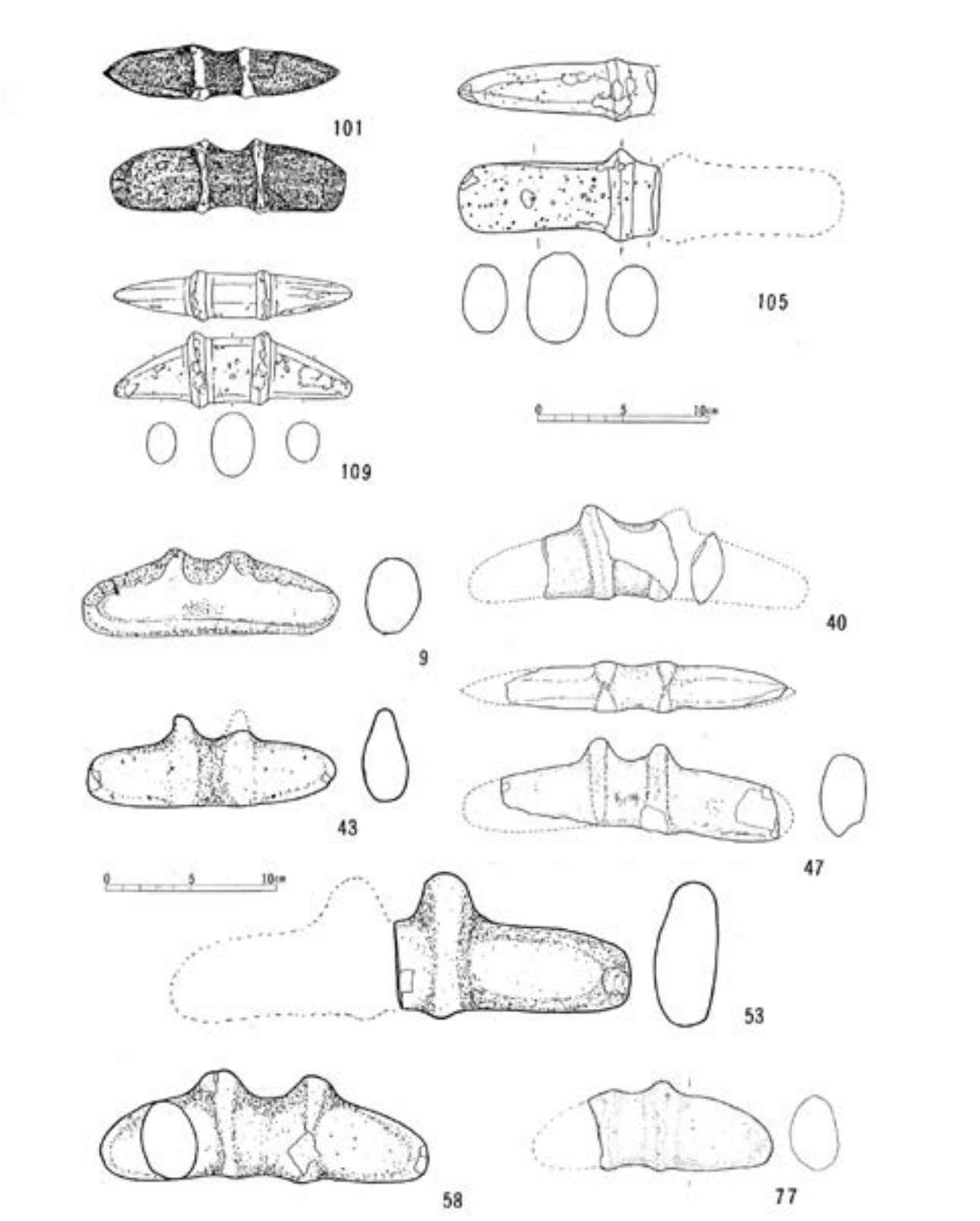
岐阜県の独鈷石 集成図版 2



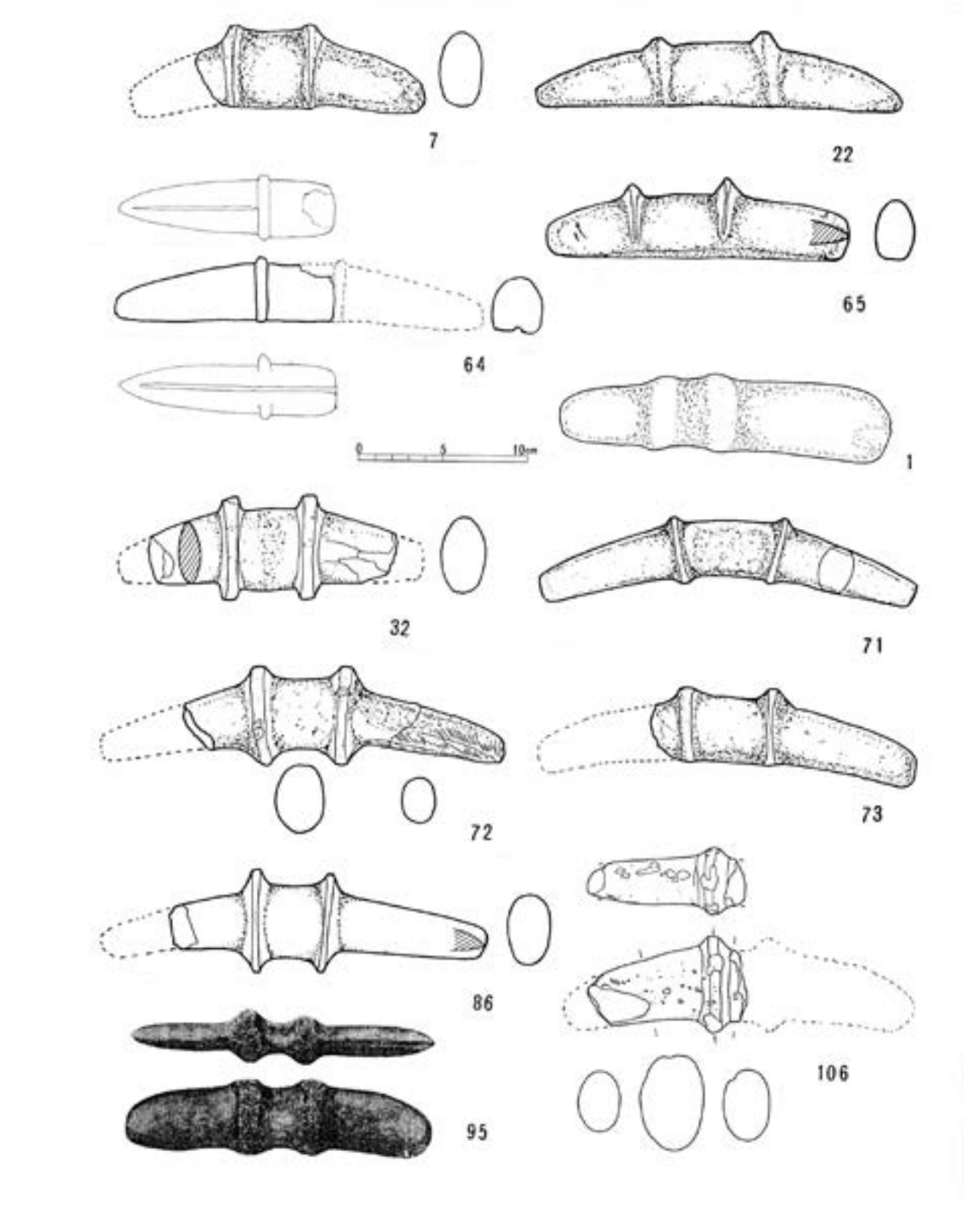
岐阜県の独鈷石 集成図版 3



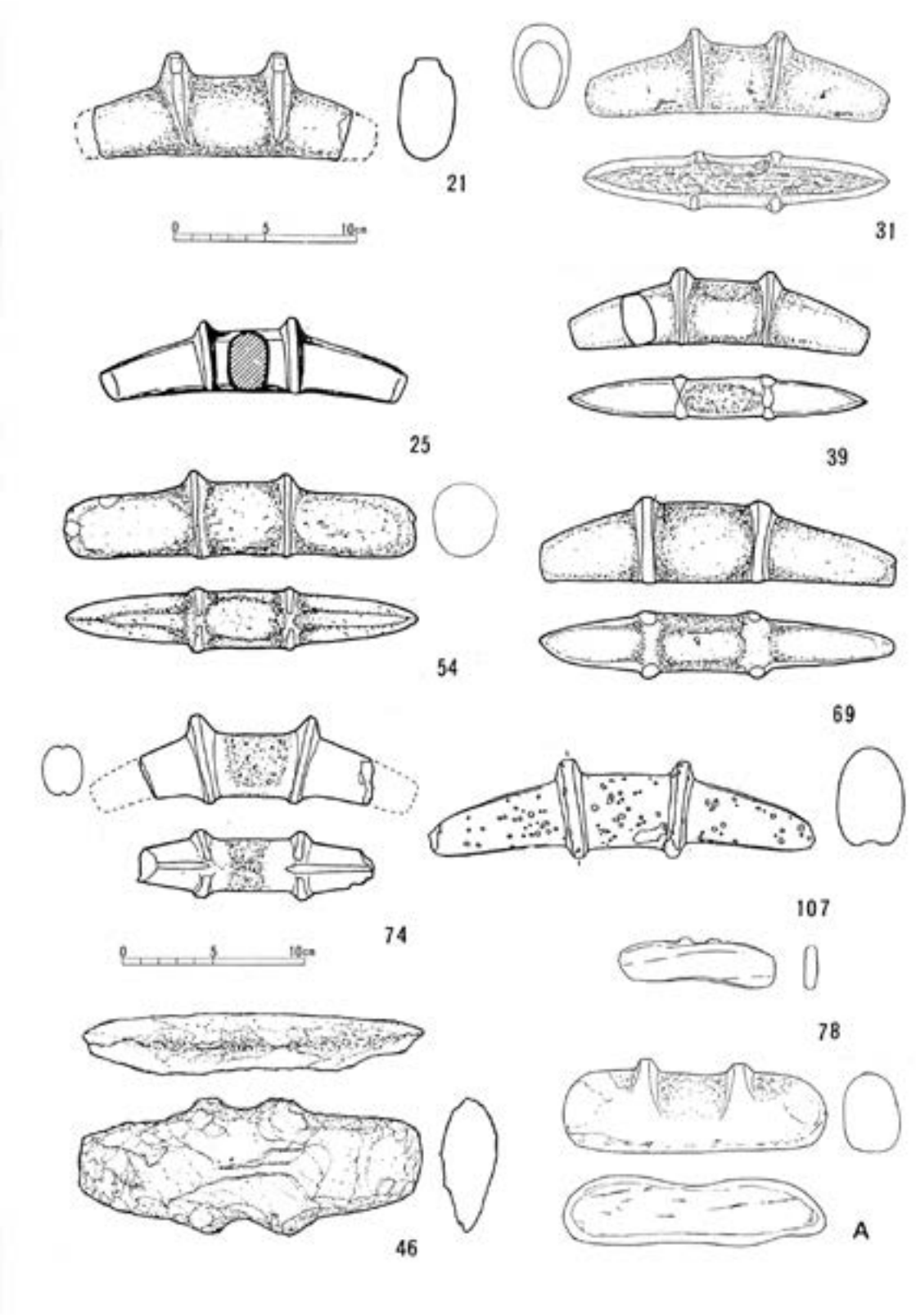
岐阜県の独鈷石 集成図版 4



岐阜県の独鈷石 集成図版 5



岐阜県の独鈷石 集成図版 6

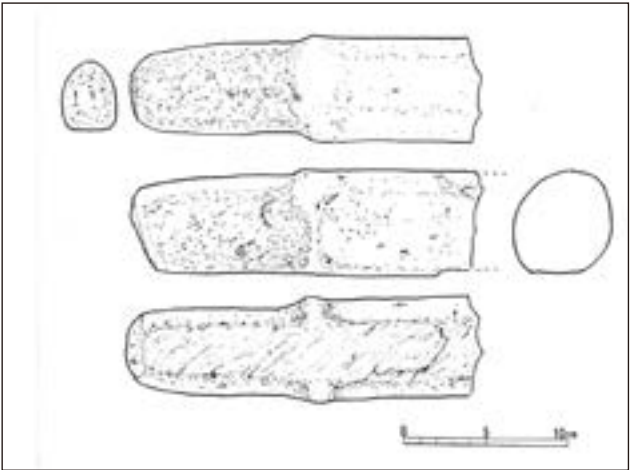


岐阜県の独鈷石 集成図版 7

6,未製品について

今回の集成において、独鈷石の未製品ではないかと思われる、あるいは指摘される資料が何点がある。まずNo.9の中切宮野資料は、加工の程度がごく少なく岡本により未製品の可能性が指摘されている。その場合、完成形はⅡ-2類の鏢が一方に片寄る形となるであろうが、No.78の家ノ下資料のように簡略化された例もあって、一応省略型と考えておく。No.34のごろう資料については、山岸により未製品と考えられるとされるが（文献91）。前章で述べたように刃部がよく使いこまれて槌状になっており、着柄して実際に作われたと考えられる。山岸が想定する完成品は、溝がよく研磨されている点で恐らく完全研磨品であろうが、それには長さが不足し極く小型の独鈷石しか作製できないであろう。また研磨製品が溝部から研磨を始めるといった例もあまり聞かない。No.46の立石例も打製のままであるのは恐らく省略化の過程のものであり、独鈷石の変遷は、美しく反りの強いⅢ型への方向性とは異なる、簡略化の方向性も同時に想定する必要がある。

ここで独鈷石未製品の最新資料を紹介したい。『どっこいし』105号（平成26年1月）に報告された荘川町赤谷資料で、今回の集成には含まれていないがⅢ-3類を作出する意図が伺える好資料である（第15図）。底面の造作が始めから意識されている点で注意に値しよう（文献134）。



第15図 赤谷遺跡の独鈷石未製品(文献134)

7,贋作について

縄文時代の石器において、特に呪術に用いられたと思われる石棒・石剣・石刀・石冠・御物石器・独鈷石・多頭石斧・硬玉製大珠の類に、後世の贋作が認められる事例は多い。筆者の管見に触れた資料もかなりの数にのぼる。贋作製作には、レプリカとしての性格を有する学術目的のものと、神社等に神宝として収蔵する宗教的効果をねらったもの、個人コレクターに本物として売りつける、骨董店を経由した商売的なものがあり、いずれも一種の技術集団があって組織的に製作を行っているらしい。勿論、科学的に検査すれば判定は容易であるが、それでも見分けのつかない精巧なもの、あるいは逆に稚拙な作りのもの等は、判断に苦しむことがある。常に本物のみ見ている研究者にはまず心配は不要であろうが、一般人にはそうでもなく、高価な値段で購入してしまった人を筆者はかなり見てきている。ここでは独鈷石のみに触れてみたい。

集成図版7のAとして示した、上宝町在家（ざいけ）とされるⅡ-2類の未製品を思わせる資料は、製作が稚拙な事と、発見者・場所・年月日まで記される記述をもとに現地調査を行った結果、そういった事実が全く無い事が判明し、贋作と断定した。1987年の筆者集成（文献62）でNo.42に列した資料であり、ここに訂正・抹消したい。

第4図Bは某家に所属される資料で、実見の結果明らかな後世作と判断出来た。他にNo.23の資料と全く同一のコピー資料にも遭遇し、こういった品が多いことが実感される。形態・石材・研磨痕（機械力）・風化度・着色・形式としての約束事等に留意して判断していただきたいと願うものである。

8,分布について

独鈷石は全国的に分布するが、集中傾向があるのは東北・関東・飛驒の3地域である。1971年の渡辺による全国発見数は600点以上とされたが（文献39）、岡本によれば1,200点を越えているとされる（文献114）。各地の研究の進展状況により数値は漸移的であるが、最新の県別出土数は岡本によれば青森80、岩手62、山形52、福島128、群馬64、秋田64、茨城91、千葉44、埼玉85、栃木162、新潟55、長野58。20点台を出土しているのは宮城、東京、富山、静岡、愛知で、近畿以西は総数でも36点にすぎない（文献同）。

岐阜県は一応総数114点で、全国的にも有数の出土量を誇る地域といえる。県下の分布状況をみてみよう（第16図～第19図）。

I型は計47点で、3類が37点と最も多い。神通川へと続く宮川水系に29点が集申し、木曽川へと延びる飛驒川水系に12点、長良川水系に5点、庄川水系に1点である。

II型は計32点で、30地点を地図上に落とした。やはり宮川水系に26点が集申し、他水系では散漫であることがわかる。

III型も計17点と減少するが分布傾向は同様である。

この分布状況をみる限り、宮川水系の集中度が極立っているが、その下流の神通川流域においては、富山県全体でも22点と、至って少ない点が意外に思われる。飛驒地方に限られた集中傾向とみることができよう。これは、石冠や御物石器と同様の傾向であり、特に棒状頭式御物石器及び斧状石冠の分布と極めて類似している（第20図、第21図、文献132・62）。山岸論文でもこの点に注目し、「飛驒地方では吉朝分類のIII型が関東に比較して多く、I型・II型も約3割とほぼ均質の出土状況である（吉朝1987）。飛驒地方には他にも「特殊な縄文石器」が多数発見されており、今後は何故この地域にこれらの石器群が顕著なのかを「独鈷石」も絡めて研究していく必要があると思われる」と記している（文献95）。

形態地域論という観点から見ると、非対称型とされる「全長のほぼ中央部から意識的にずれた位置に挟り」のあるものは、有溝石斧を別として上野垣内資料（No.1）が該当するが、他はNo.69・No.77がやや近似する程度で決して多くはない。I-3型のそれは恐らく素材の形に左右されるものであろう。「西日本型独鈷状石器」に関しては皆無として良い。

岐阜県の独鈷石の分布状況は、飛驒地方の宮川水系に極めて集中度が高い点と、石棒・石冠・御物石器等の呪術用石器を所有する遺跡が、独鈷石も同時に所有し祭祀を行っている点において、注目される要素があろう。



第20図 棒状頭式御物石器分布図(文献132)



第21図 斧状石冠分布図(文献62石冠集成)



第16図 有溝石斧及び特殊型独鈷石分布図



第17図 I型独鈷石分布図



第18図 II型独鈷石分布図



第19図 III型独鈷石分布図

9.独鈷石の機能について

独鈷石が当初は実用具であったとする考え方は多く、次第に儀器化したとするのが一般的なようである。渡辺は文献 106 において、中央部の鏢の間や溝中に天然アスファルトが付着していて装着法を示す資料 10 点を提示している。さらに X 印状の沈線で緊縛状態を示すと思われる資料から装着想定図を示した（第 22 図）。使用の一案として「シャーマン殺し」の儀式的想定など、縄文人の死と再生を祈る信仰の一環も示された。

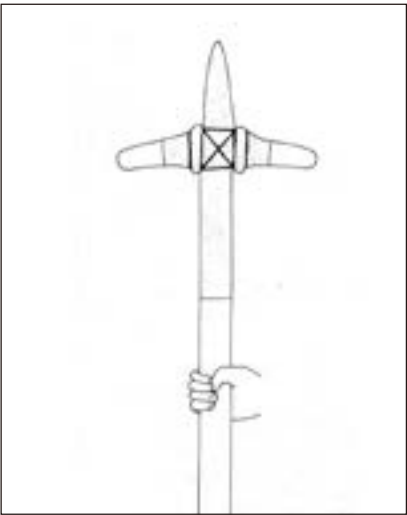
岡本は、成立の当初から祭りの道具であったとみており、赤色付着物・漆・煤（すす）などの痕跡がそれを示すとしている。遺物の量的な面でもその稀少性を取りあげている（文献 114）。

山岸は、第 1 類石錘、第 2 類石斧・石槌などの実用具、第 3 類祭祀具、と 3 分類し、3 類のみを特殊な縄文祭祀遺物としての独鈷石として位置づけた（文献 95）。

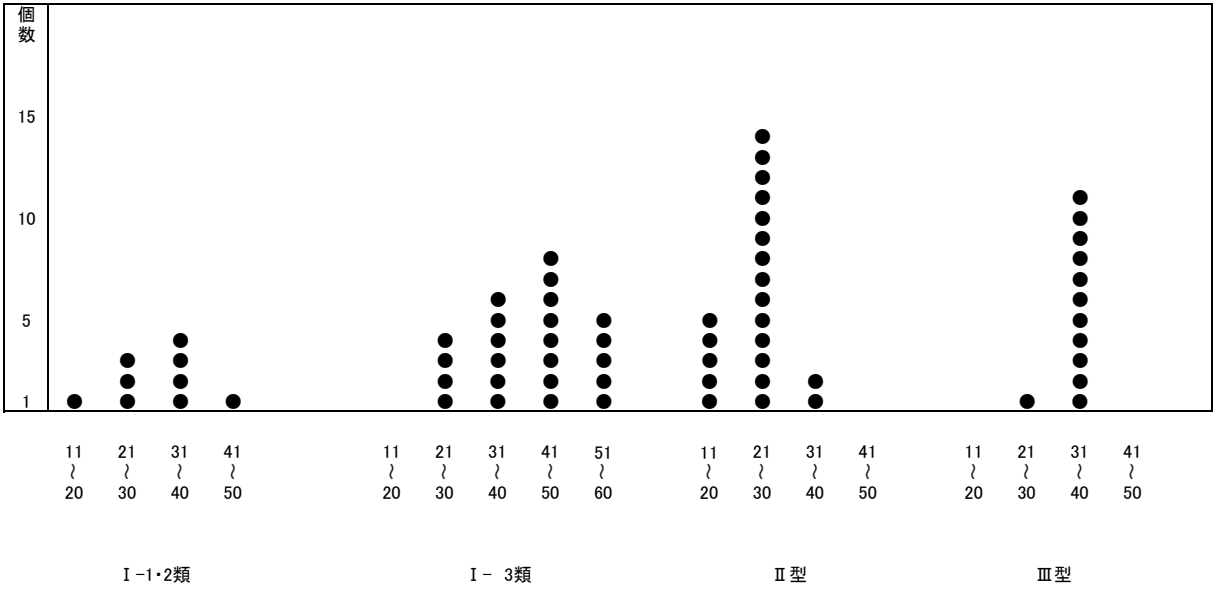
ここで、岐阜県の独鈷石について折損・着柄・機能性等の問題を考えてみたい。

独鈷石の折損品については、当然ながら I -3 類が完品で残る割合が高いことからこれを除外しておく。片側の破損が 16 点、両側の破損が 5 点ある。古折を前提とするが、中には保管中に折れた場合もあると思われ、No.72 の資料はいつの頃か接合されている。使用によって折れた場合、普通はそこで遺棄され则认为るが、両側が折れるまで使用されたとは考えにくい。そこに何らかの意図が感じられよう。特にⅢ型の優品中に 3 点が認められるのは注意に値する。石剣や石棒祭祀にみられる様な破碎行為があった可能性を考える必要がある。一般に石冠や御物石器は、破碎を伴わない祭器として捉えられており、火中に投じる様な行為はあったとしても多くは完品で遺存する。独鈷石がその類に入るかはわからないが、ある段階（終末期？）で破碎を伴う行為があったとみるのも一考に値する。

次に、ピッケル状に着柄されるという渡辺論考をもとに独鈷石の中央部の厚さの統計を第 3 表に示し比較し



第22図 渡辺(文献106)による独鈷石装着想定図



第3表 独鈷石の中央部厚分布表

た。I -3 類は恐らく縄を巻くなど使用方法の相違もあって、厚さは 20 ミリ台から 50 ミリ台に分散して一定でないが、Ⅱ・Ⅲ型はほぼ安定した厚みを有し、木製の柄への着装にあたっての法量の規定があったことを思わせる。

I -3 類の丸頭形をなす独鈷石については、古くから別の機能を持った石器ではないかとの指摘がある（山岸文献 95 ほか）。報告書によっては有溝石錘として分類する例も多く、独鈷石としての判断は個々の研究者に委ねられているらしい。筆者も 1987 年の集成（文献 62）の分類時より I -3 類の石錘説を留保しており、検討の余地はあろう。

検討するにあたっては、形状・加工度・使用痕・機能・着柄等について検証せねばならない。まず形状は、分銅形・ひょうたん形・円筒形などと表現されるが原材料の相違と加工度が問題となる。自然石に溝のみ施したものは形状がほぼ一定するが、全体に敲打を加えたものに関しては先端が尖る形状をなす事が多く（No.41・No.56・No.111 など）、完成形が意識されている。この形にするという意図で特殊な性格を与えているといえる。この点でNo.114の資料の様に帯状の造作がみられる例は、やはり独鈷石としての性格を有しているといえよう。

有溝石錘という石器の機能としては、漁網や釣具の錘り（おもり）の他、アンギン等の編物の錘りとしての機能がある。この場合数量も問題となり、加工度も最低限で使用可能である。家ノ下遺跡の 5 点の有溝石錘（第 13 図）は、こういった観点で実用具としての錘りの機能が推測される。

次に槌としての機能を有する有溝石器がある。木製の柄は無理としても縄や木の皮を巻きつける事によって槌として使用可能な道具であり、民俗例も多いと思われる。例えば栃や栗・榎の実の粉碎、ワラビ・クズ・カタクリの根からのデンプン採取、藤蔓（つる）など植物繊維の軟化等に石槌は使用されたであろうし、その際の縄柄による操作法がより効果的であったろう。

使用痕の問題は、対象物の軟度により判定は困難を伴うが、石を台とした栃タタキ石の使用痕と共通したものもあると思われる。

これらの事を勘案して、儀器として特殊な使われ方をした I -3 類と、石錘・敲打器機能を有する I -3 類を区別すべく努力が必要と思われる。勿論、実用品から祭器へと転換した石器群もある事は確かであるが、当初から儀器として出発した宗教遺物が多い事は、飛騨地方の種々の呪術用石器を見ても明らかであり、例えば動物模倣を原点とする老いねずみ石冠やかつをぶし形石器等に他の機能は見い出せないと筆者は考えている（文献 132）。

10.岐阜県の独鈷石の特性について

筆者の 1987 年の分類（文献 62）における平置可能型（据置型）の独鈷石の設定は、恐らく当地に限られた事ではなからうが、底面製作時の必要以上の造作の不思議さからこの型式を設定したのであり、数もかなり多い。着柄する意図のない据置型独鈷石はやはり、そこに「置かれる」タイプの祭器であり、それは石冠・御物石器（濃飛型）・老いねずみ石冠・かつをぶし形石器などの特性でもある。石冠における石棒状・石斧状造形は、恐らく男性原理を象徴する石棒・石斧を平置型に造作したものであると思われる。石冠を着柄して使用したとする論考も承知しているがあまり合理的ではない。

岐阜県、特に飛騨地方に特殊な石器が多い事は古くから知られているが、長大な磨製石斧・打製石斧（長さ 30 ～ 40cm）、実用具としての機能を持たない石鋸形石冠などにその特性を見る。据置型独鈷石の出現もその一端かも知れない。山岸の指摘（文献 95）のように、関東地方に比べて少し遅れる飛騨の独鈷石の盛行は、儀器化をさらに深めた飛騨の特性としてみることができよう。

石冠・御物石器ともに全国出土数の半数以上を占める飛騨において、独鈷石を用いた何らかの儀式もまた、

着実に遂行されていたことが知られる。刃部を備える点で共通する斧状石冠と独鈷石との関連については、祭祀の目的・方法が異なるものであった事を示しているのであろう。

石材については今回あまり触れなかったのは、石質同定への厳密さの点と、不明個体の多さにもよる。今のところ何らかの傾向はつかみ得ない。ただ粘板岩・閃緑岩のように堅く黒光りする素材への変化があるとすれば、それは大野が文献 35 で日影資料について述べたように「石質は閃緑岩である。銅剣にみられるような稜をもつ。金属器の影響が認められるとすれば、もはや縄文式のものとはいえないであろう」との見解に、一つの示唆が与えられる。石棒が小型・軽量化した後・晩期の石刀・石剣や、北陸型御物石器のように、粘板岩系石材への転換が金属器と何らかの関連があると考える論考は多くあり、独鈷石もまた、その一端を担う可能性もあろう。

飛驒と美濃との絶対量の相違は歴然としているが、それが分水嶺をはさむ水系の相違や、山地と平野部との相違にとどまることなく、より重要な問題を内包していると考えたい。恐らく弥生文化受容までの道のりの相違もあろうし、またそれ故のいわば縄文的アイデンテティの発露の必要性が求められたかも知れない。

まだなお検討される点が多い。

## 11.おわりに

以上、岐阜県の独鈷石について種々のデータを示し、その実態と傾向を探ってみた。不備な点多かろうが、現段階での一応の成果と考えご寛容願いたい。他地域の知見に乏しい筆者にあっては、特に飛驒地方に重点を置いた論考に偏向したきらいはあろうが、それなりの重要性を飛驒という地域は秘めているとも考えている。

端的には、縄文中期から晩期に至る時期の、宮川～神通川水系における、北陸地方と共通した種々の祭器を伴う、1つの文化圏といったものを形成している点において語られる要素が強く感じられるのである。

諸処の問題点も含めて、独鈷石に対する自身の考え方を述べたわけであるが、今や集成作業の段階を終え、新たな研究の時代に入ったことを認識し、新しい研究者たちに対し活発な議論を交していただきたいと願うものである。本稿がその一助となればこの上ない幸いである。

稿を終えるにあたり、発表の機会を与えて戴いた光ミュージアム関係者の方々に深甚の謝意を表するとともに、文献や資料・写真等の提供に協力していただいた諸氏・諸機関に対し、その名を列記して感謝の意に換えたいと思う。(敬称略)

岐阜県文化財保護センター      関市文化財保護センター      高山市教育委員会  
富山市考古資料館      飛驒市教育委員会      飛驒民族考古館  
岩田勲      上原真昭      岡本孝之      奥義次      後藤信祐      齋藤弘道  
沢田伊一郎      田井中洋介      滝沢規朗      中川鏑一      藤田富士夫  
松井朗      山岸良二      渡辺誠

### 独鈷石主要文献目録

1. 木内石亭 1773 『雲根志』後編四,十四
2. 藤井貞幹 1789 『集古図』巻十二
3. 二木長嘯 1790 ? 『神代石図』
4. 佐藤泰郷 1886 『日本古物小集会図録 千代の鏡』
5. 田中正太郎 1892 「飛驒ノ石器ノ一二」『東京人類学会雑誌』8-79
6. 田中正太郎 1893 「飛驒国吉城郡国府村三川組エンダソラの遺跡」『東京人類学会雑誌』8-89
7. 田中正太郎 1897～1928 『日本石器時代人民遺物発見地名表』第1版～第5版
8. 大野延太郎 1909 「独鈷石の形式分類に就いて」『東京人類学会雑誌』24-276
9. 朝戸高山 1919 『鶯夢軒所蔵石器図石のまきもの』
10. 犬塚行蔵 1929 「益田郡萩原町縣神社石器時代遺物観覧記」『飛驒史壇』8-12
11. 林魁一 1930 「美濃国郡上郡奥明方村小川の遺跡」『人類学雑誌』45-10
12. 林魁一 1933 「飛驒高山附近の石器時代遺物及び遺跡」『史前学雑誌』5-2
13. 加藤輝次 1933 「朝戸高山師遺稿抄」『飛驒考古学会会報』2
14. 中谷治宇二郎 1935 『日本先史学序史』岩波書店
15. 飛驒考古土俗学会 1935 『飛驒石器時代遺蹟地名表』
16. 藤森栄一・神田五六 1936 「弥生式遺跡出土の両頭石斧」『考古学』7-10
17. 林魁一 1936 「飛驒益田郡朝日村の石器時代遺跡及遺物」『人類学雑誌』51-4
18. 林魁一 1936 「美濃北濃村前谷の遺跡及び遺物」『考古学論叢』3
19. 林魁一 1937 「吉城郡国府村三川の遺跡」『ひだびと』5-2
20. 林魁一 1937 「飛驒国吉城郡上宝村石器時代遺跡遺物に就いて」『史前学雑誌』9-6
21. 林魁一 1939 「清見村三ッ谷附近出土の遺物」『ひだびと』7-6
22. 多賀秋五郎 1941 『飛驒史の研究』
23. 小川栄一 1952 『美濃の石器時代文化』
24. 清野謙次 1954 『日本考古学人類学史』上巻 岩波書店
25. 朝日村 1956 『朝日村誌』
26. 岐阜県教育委員会 1957 『荘白川総合学術調査報告』
27. 大江~~兎~~・下形武 1958 『上宝村の先史時代』
28. 国府町 1959 『国府村史』全
29. 水野清一・小林行雄 1959 『図解考古学辞典』東京創元社
30. 澄田正一 1960 「荒城神社縄文式時代遺跡」『岐阜県指定文化財調査報告書』4
31. 岐阜県教育委員会 1962 『岐阜県遺跡目録』
32. 紅村 弘 1963 『東海の先史遺跡』綜括編
33. 大江~~兎~~ 1965 『飛驒の考古学』I ―益田川流域の縄文遺跡―
34. 白川村 1968 『白川村史』
35. 宮村 1968 『宮村史』
36. 大参義一 1968 「前田遺跡出土石器類」『岐阜県指定文化財調査報告書』11
37. 中津川市 1968 『中津川市史』上巻
38. 土田吉左衛門 1970 「信包出土の一頭石斧について」『飛驒春秋』15-6
39. 渡辺誠 1971 「兵庫県城崎郡香住町の縄文時代遺物」『古代文化』23-4

40. 岐阜県 1972 『岐阜県史』通史編原始

41. 可児町北裏遺跡発掘調査団 1973 『北裏遺跡』

42. 岐阜県教育委員会 1976 『岐阜県遺跡地図』

43. 清見村 1976 『清見村誌』

44. 岐阜県博物館 1979 『濃飛の先史時代』特別展図録

45. 富加町 1980 『富加町史』下巻

46. 美濃加茂市 1980 『美濃加茂市史』通史編

47. 米田耕之助 1981 「独鈷状石製品覚え書」『古代』71

48. 犬塚みつ 1981 『犬塚行蔵 飛驒考古学遺稿』（再版）

49. 能登 健 1981 「信仰礼儀にかかわる遺物（Ⅰ）」『神道考古学講座』第1巻前期神道

50. 鈴木道之助 1981 『石器の基礎知識』Ⅲ 柏書房

51. 宮川村 1981 『宮川村誌』通史編上

52. 中津川市教育委員会 1981 『下島遺跡発掘調査報告書』

53. 白川村 1983 『巾通り遺跡発掘調査報告書』

54. 恵那市 1983 『恵那市史』通史編1

55. 岐阜県博物館 1985 『濃飛の縄文時代』特別展図録

56. 馬瀬村 1985 『馬瀬村の埋蔵文化財』

57. 山岸良二 1985 「千葉県出土の「独鈷石」」『考古学雑誌』70-4

58. 後藤伸祐 1985 「独鈷状石器小考」『唐沢考古』5

59. 郷浩 1986 『伝説と歴史の谷間』

60. 尾関章 1987 「二木長嘯の収集品」『岐阜県博物館調査研究報告』8

61. 富山市考古資料館 1987 『栗山コレクション目録』

62. 吉朝則富 1987 「独鈷石集成」『飛驒の考古学遺物集成』Ⅱ

63. 吉朝則富 1988 「どっこいし雑感」『どっこいし』創刊号 高山考古学研究会

64. 石原哲彌 1990 「飛驒の考古学研究史」7 二木長嘯そのⅡ『どっこいし』35

65. 吉朝則富 1990 「中切町宮野出土の独鈷石について」『どっこいし』35

66. 朝日村 1991 『前橋遺跡』

67. 中津川市教育委員会 1991 『久須田遺跡』

68. 吉朝則富 1991 「東山中学校所属の独鈷石」『どっこいし』36

69. 吉朝則富 1992 「丹生川村田口家の考古資料」『どっこいし』39

70. 金子貞二 1993 『明宝村史』通史編上巻

71. 岐阜県文化財保護センター 1993 『荒城神社遺跡』

72. 武儀町 1993 『武儀町史』

73. 国府町教育委員会 1994 『立石遺跡』

74. 吉朝則富 1995 「独鈷石の追加資料」『どっこいし』48 飛驒考古学会

75. 山岸良二 1995 「独鈷石形態地域論」—飛驒と関東—『飛驒と考古学』飛驒考古学会20周年記念誌

76. 岡本孝之 1996 「弥生化を強制された石器たち」『神奈川考古』32

77. 岡本孝之 1996 「最後の白河型石器」『異貌』15 共同体研究会

78. 藤本健三 1997 『丹生川村史』資料編 丹生川村

79. 田井中洋介 1997 「弥生社会からみた独鈷石」『紀要』10 𠂇滋賀県文化財保護協会

80. 岐阜県文化財保護センター 1997 『カクシクレ遺跡』

81. 宮川村教育委員会 1997 『家ノ下遺跡』

82. 松井朗 1998 「いわゆる独鈷石の新資料」『どっこいし』57

83. 和良村 1998 『和良村の文化財』第3集

84. 大和村 1998 『大和村史』

85. 岐阜県文化財保護センター 1998 『牛垣内遺跡』

86. 宮川村教育委員会 1998 『宮ノ前遺跡』

87. 岡本孝之 1998 「近畿の白河型石器とその考古学的意義」『列島の考古学』渡辺誠先生還暦記念論集

88. 岡本孝之 1998 「東日本からみた九州・沖縄の石器時代文化」『日本考古学協会1998年度沖縄大会資料集』

89. 山本直人 1998 「独鈷石」『祭祀具Ⅰ 石川県考古学資料調査・集成事業報告書』

90. 岡本孝之 1999 「遺物研究独鈷状石器（独鈷石・白河型石器）」『縄文時代』10「縄文時代文化研究の100年」

91. 山岸良二 1999 「「独鈷石」未成品考」『東邦考古』23

92. 宮川村教育委員会 1999 『塩屋金清神社遺跡B地点発掘調査報告書』

93. 山岸良二 2000 「越の「独鈷石」考〈其一〉」—越中出土例を中心に—『原始・古代の日本海文化』同成社

94. 吉朝則富 2000 『上枝村史』第2章・第6章 上枝村史編纂委

95. 山岸良二 2000 「「独鈷石」形態地域論Ⅱ」—「西日本型独鈷状石器」再考—『人類史研究』12

96. 宮川村教育委員会 2000 『宮ノ前遺跡発掘調査報告書Ⅱ』

97. 滝沢規朗 2001 「新潟県の独鈷状石器」『新潟考古』12

98. 久々忠義 2001 『風野遺跡』宇奈月町教育委員会

99. 吉朝則富 2001 「朝日村寺沢石原遺跡の独鈷石」『どっこいし』68

100. 沢田伊一郎 2002 「濃飛平野北部・十四条遺跡の独鈷石について」『どっこいし』69

101. 吉朝則富 2002 「朝日村ごうろう遺跡の独鈷石」『どっこいし』69

102. 沢田伊一郎 2002 「郡上郡和泉村の考古資料」『どっこいし』71

103. 宮川村教育委員会 2002 『宮ノ前遺跡Ⅲ・塩屋島遺跡』

104. 山岸良二 2003 「序論 祭祀遺物研究序説」—「独鈷石」命名考—『原始・古代日本の祭祀』同成社

105. 岡本孝之 2003 「扁平な白川型石斧」『利根川』24・25

106. 渡辺誠 2003 「独鈷状石器の着装法」『史峰』31

107. 本永義博 2003 「蔵柱学校に保管されていた独鈷石」『どっこいし』74

108. 吉朝則富 2003 「国府町安城寺の独鈷石」『どっこいし』74

109. 岡本孝之 2004 「埼玉県白川型石斧の再検討」『異貌』飯塚博和氏追悼号

110. 町川克己・吉朝則富 2004 『宮村史』通史編1 第1部原始

111. 吉朝則富 2004 「高山市中之切遺跡の独鈷石」『どっこいし』75

112. 吉朝則富 2005 「国府町瓜巢土洞の独鈷石」『どっこいし』79

113. 奥義次 2006 「三重県神殿遺跡出土の独鈷状石製品について」『研究紀要』第15-1号 三重県埋蔵文化センター

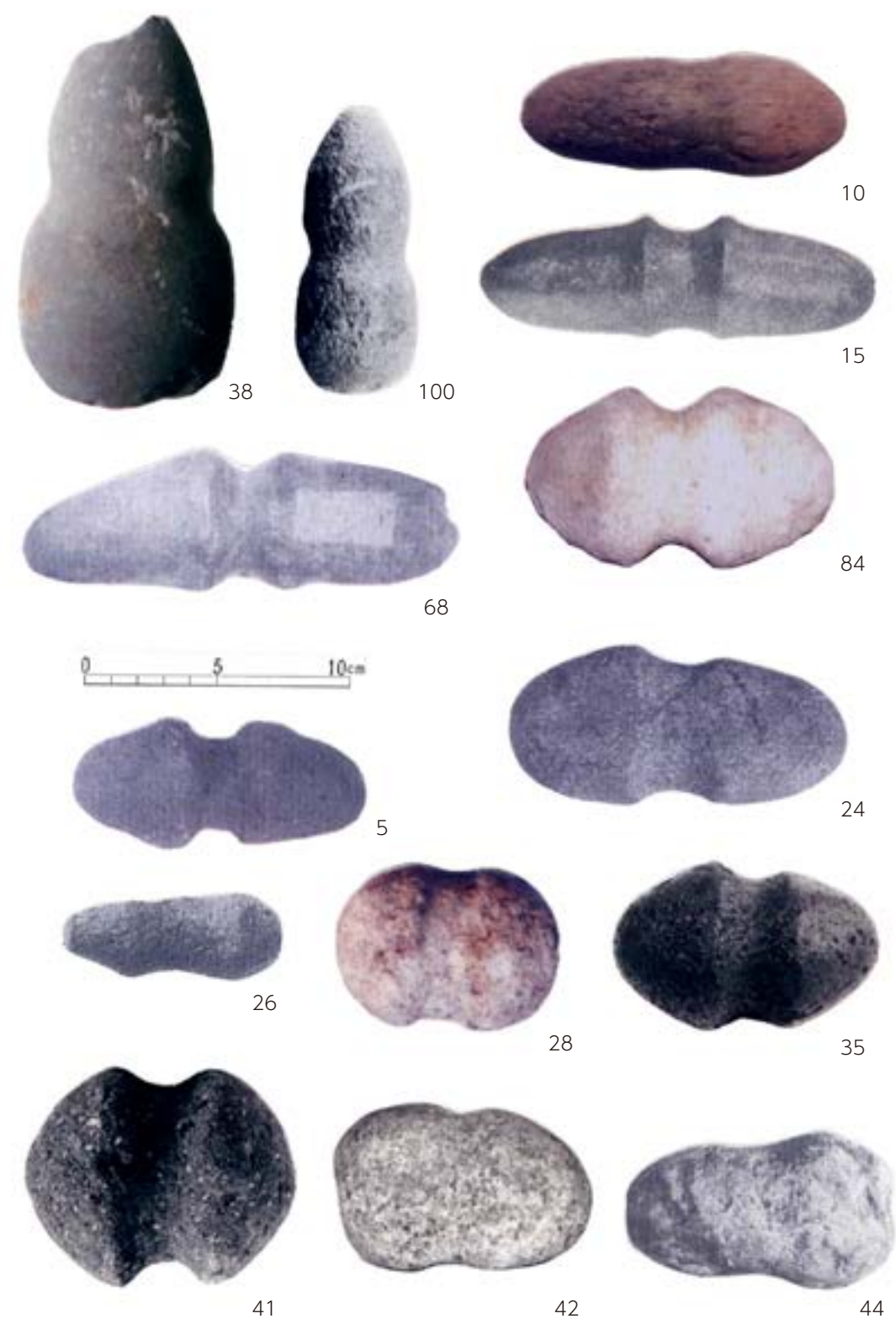
114. 岡本孝之 2006 「青森県の白川型石斧」『古代』119

115. 岡本孝之 2007 「白川型石斧の初源形態」『異貌』25

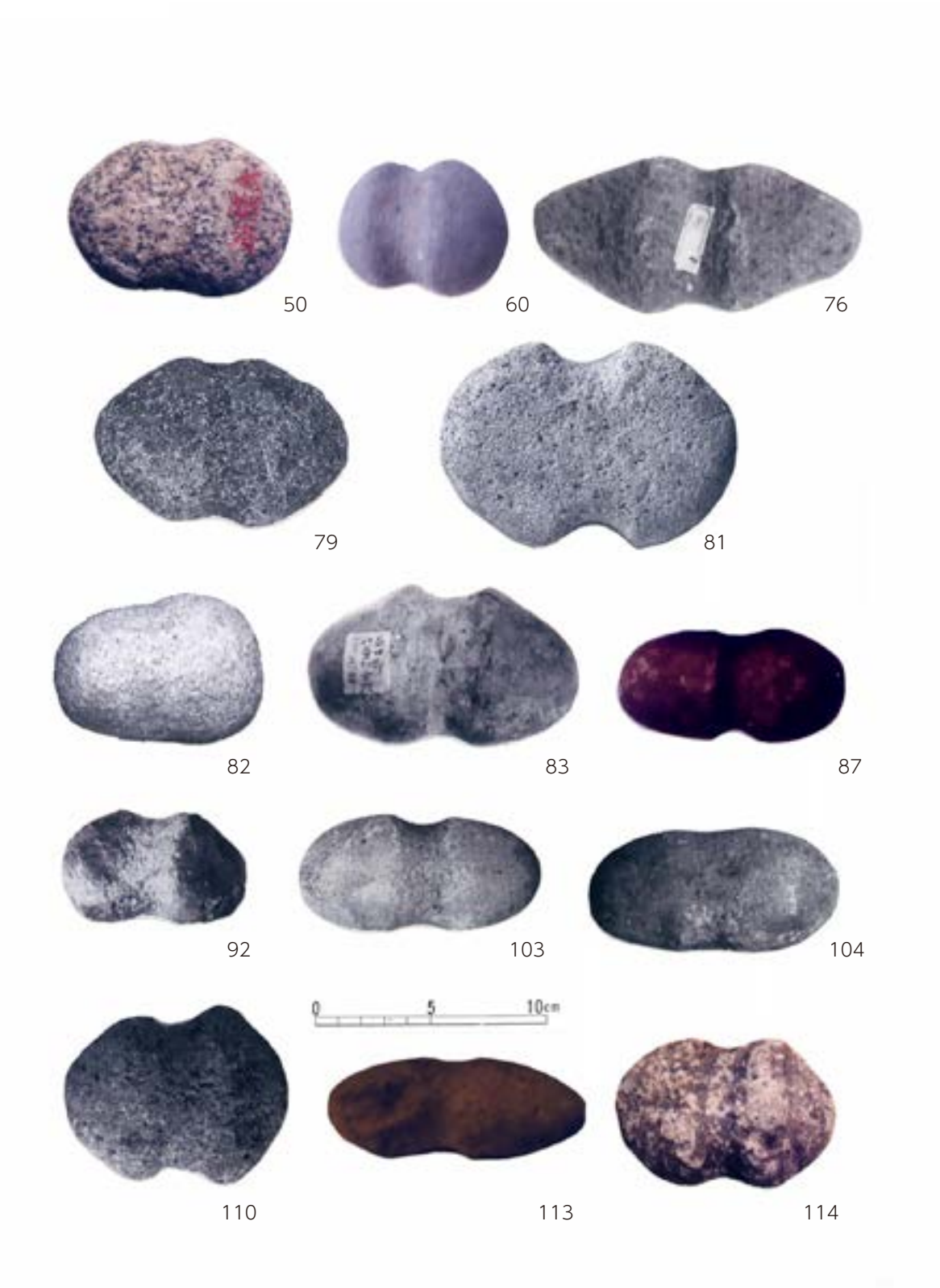
116. 吉朝則富 2007 『国府町史』考古指定文化財編 国府町

117. 山岸良二 2007 「最新「独鈷石」研究4題」『東邦考古』31

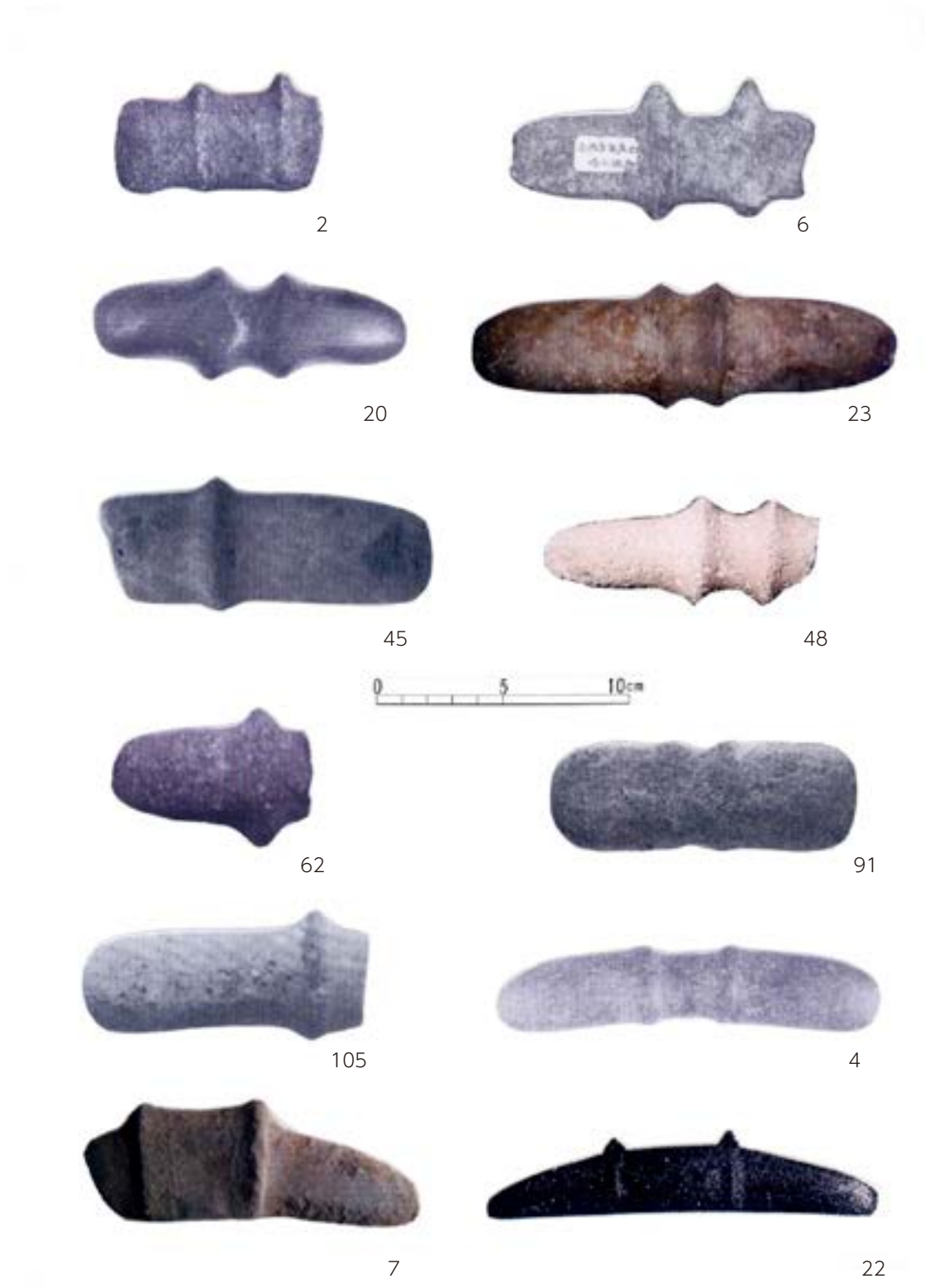
118. 沢田伊一郎 2007 「加茂郡富加町郷土資料館所蔵の独鈷石」『どっこいし』84  
119. 沢田伊一郎 2008 「関市中之保若栗遺跡の独鈷石」『どっこいし』88  
120. 吉朝則富 2008 「飛驒の独鈷石について」『斐太紀』平成20年度研究紀要 飛驒学の会  
121. 吉朝則富 2008 「有溝石斧の新資料」『どっこいし』88  
122. 岡本孝之 2008 「伊江島型石斧」『廣友会誌』4  
123. 岡本孝之 2008 「岩手県の白川型石斧」『神奈川考古』44  
124. 吉朝則富 2009 「桜洞縣神社遺物見学記」『どっこいし』90  
125. 関西縄文文化研究会 2010 『縄文時代の精神文化』第11回研究集会 発表要旨集・資料集  
〔追加文献〕  
126. 吉朝則富 2002 「藤井貞幹『集古図』の独鈷石」『どっこいし』70  
127. 岡山準 1930 「飛驒石器時代遺物分布」『考古学』1-3  
128. 高山考古学研究会 1987 『飛驒の縄文時代』特別展図録  
129. 福井重治 1988 「石のネットワーク」—明治19年日本古物小集會に出品された石器の謎—『有斐』30  
130. 丹生川村文化協会 2004 『万代の鏡』  
131. 婦中町 1997 『婦中町史資料編』 藤田富士夫編  
132. 吉朝則富 2012 「飛驒の御物石器」『光記念館研究紀要自然科学』第7号  
133. 吉朝則富 2012 「今月号の独鈷石」『どっこいし』100  
134. 吉朝則富 2014 「独鈷石未製品報告」『どっこいし』105



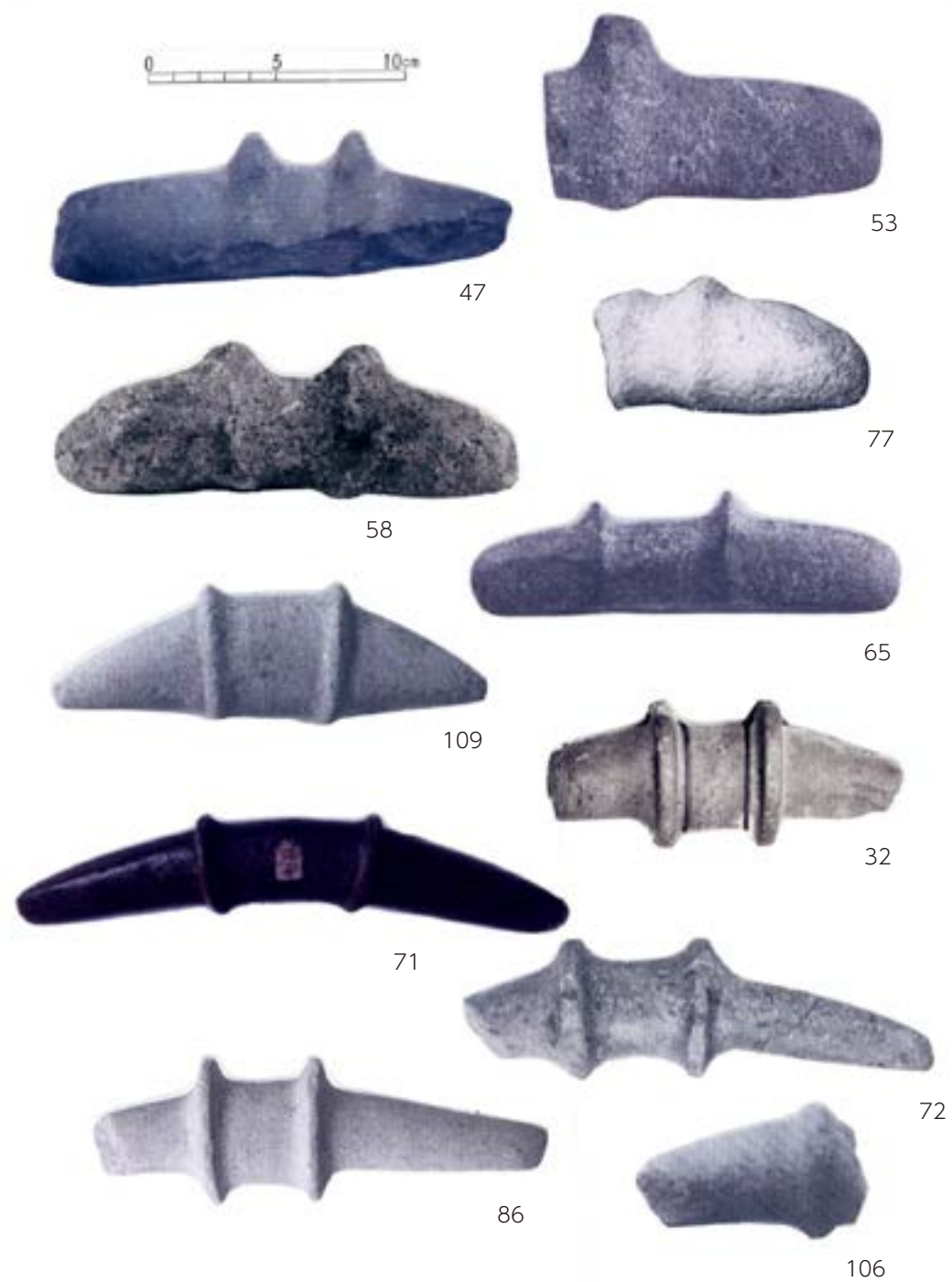
写真図版 1



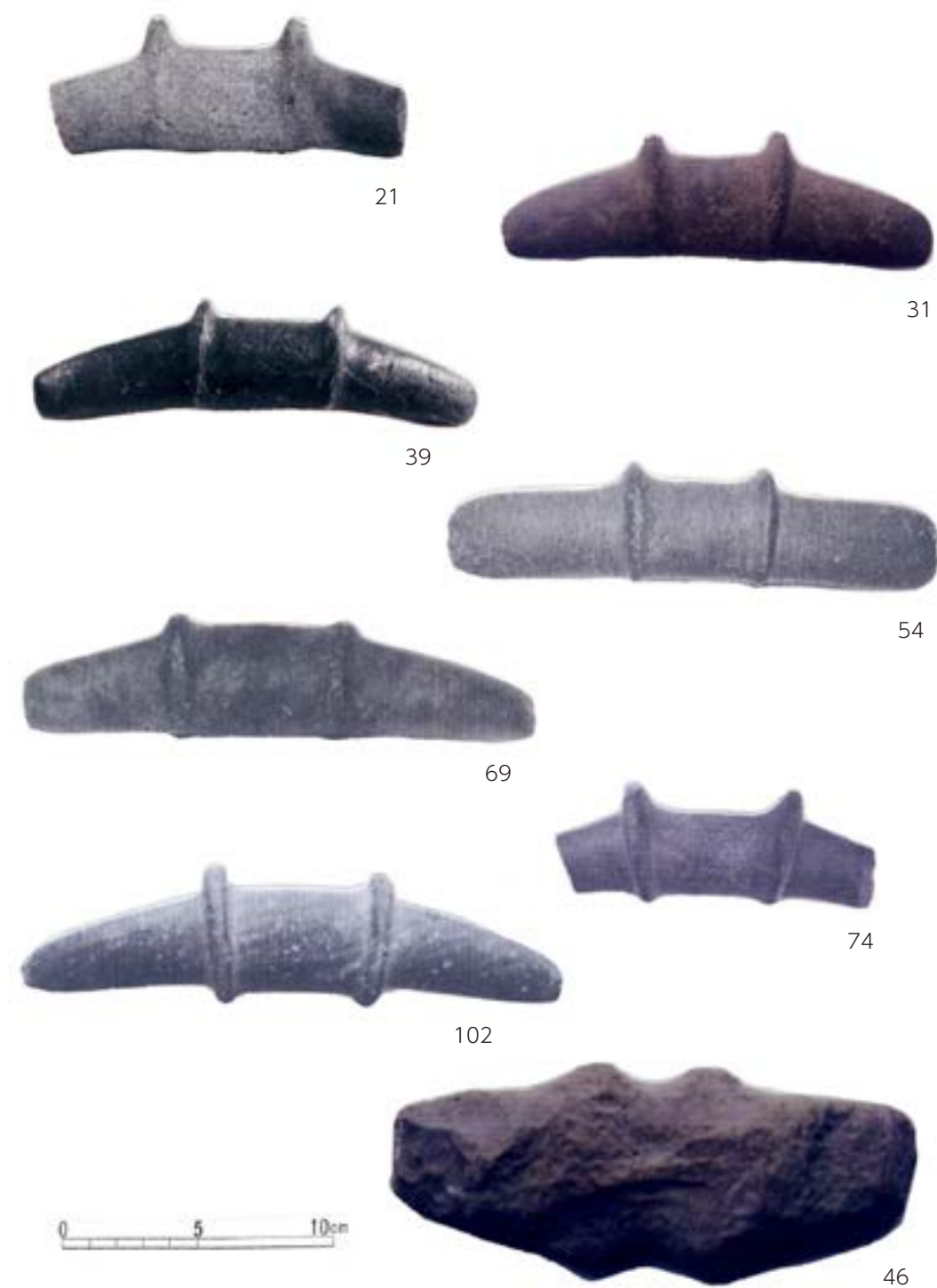
写真図版 2



写真図版 3



写真図版 4



写真図版 5

# 館蔵資料紹介:飛騨山地のデボン系福地層産床板サンゴ化石 *Thamnopora hayasakai* Niko, 2005 について

児子修司

広島大学総合科学部自然環境研究講座

Niko S. and Senzai, Y., 2010: Stratigraphy of the Devonian Kamianama Formation in the Kuzuryu Lake – Ise River area, Fukui Prefecture and its favositid coral fauna. *Bull. Natl. Mus. Sci., Ser. C*, vol. 36, p. 31 – 59.  
Niko S. and Senzai, Y., 2011: Additional material of favositid tabulate corals from the Devonian Kamianama Formation, Fukui Prefecture, Japan. *Bull. Natl. Mus. Sci., Ser. C*, vol. 37, p. 29 – 41.  
Steininger, J., 1831: Bemerkungen über die Versteinerungen, whlche in dem U e b e r g a n g s - Kalkgebirge der Eifel gefunden werden. 44 pp., Trier.

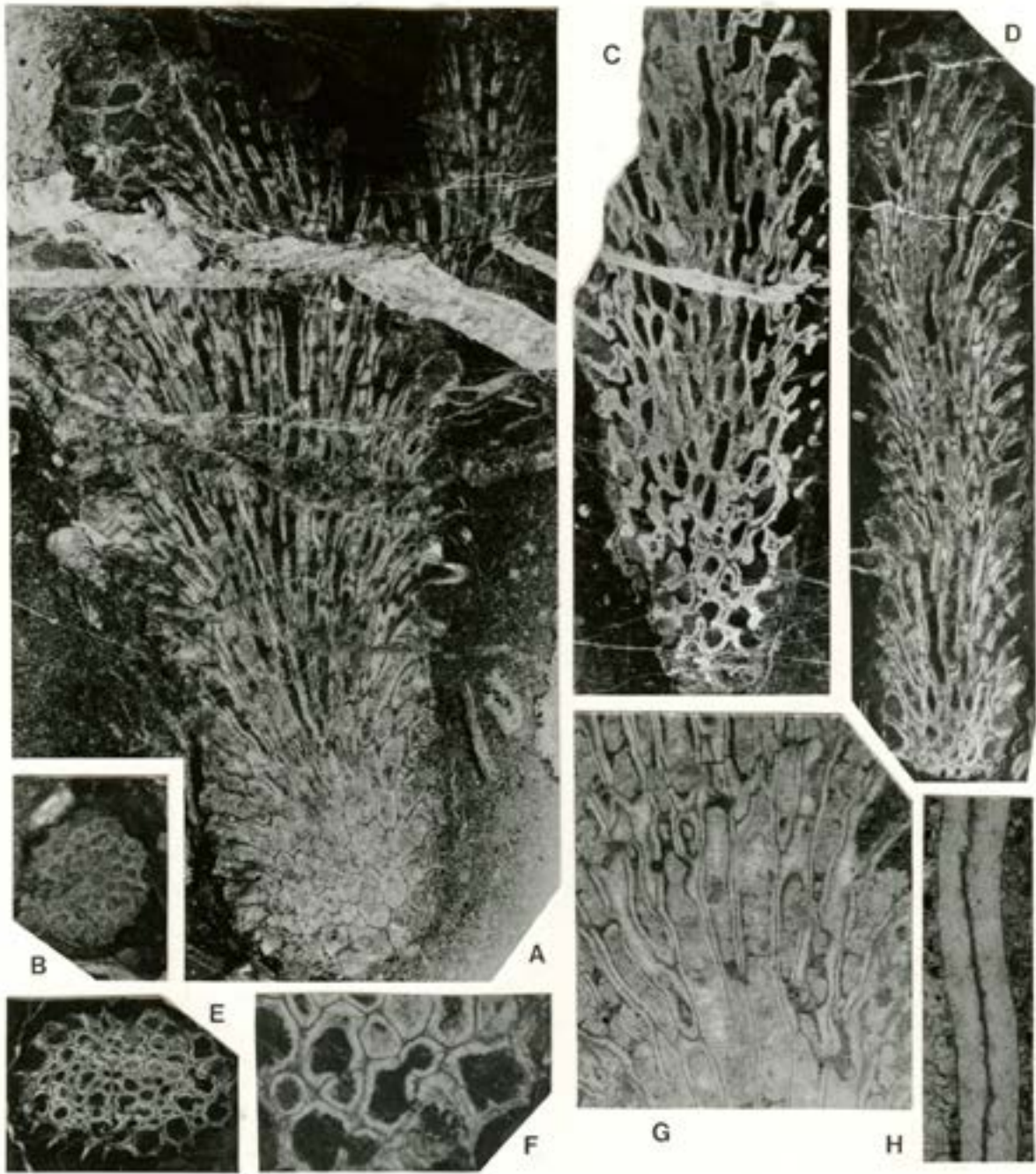
タムノポーラ (*Thamnopora*) は、Steininger (1831) により中部デボン系産種、*T. madreporacea* Steininger, 1831 に基づき提唱されたハチノスサンゴ目パキポーラ科の床板サンゴで、中期古生代のシルル紀からデボン紀にかけ世界的に分布していたことが知られている。本邦からも Niko (2003, 2005)、Niko and Senzai (2011)、Niko *et al.* (2014) により 5 種が報告されているが、これらの内、最も生層序学的に重要な種が飛騨山地のデボン系から多産する *T. hayasakai* Niko, 2005 である。本種の特徴としては、(1) 枝直径が 3–10 mm 程度とデボン紀の種としては比較的細いこと、(2) サンゴ個体直径が 0.27–1.55 mm (成熟個体の平均値：1.06 mm) であること、(3) 隔壁棘が散在すること、(4) 床板の発達が悪いこと、が上げられる。岐阜県高山市奥飛騨温泉郷に分布する福地層下部の高原川部層が当初の本種産出層準であった。その後、Niko and Senzai (2010) により福井県大野市九頭竜湖 – 伊勢川地域の上穴馬層大伊勢谷部層、茨木・児子 (2012) により新潟県糸魚川市蓮華地域のペルム系白馬岳層中の礫からも発見され、地層対比、時代、地質構造発達史に関する議論の根拠となっている。

光記念館所蔵の標本 (第 1 図, A) は、高原川部層中の前期デボン紀 (Pragian–Emsian) を示す黒色泥質石灰岩から産出した資料で、本種を新種として提唱する際に模式標本 (paratype) に指定されている。現在から約 4 億 1 千万年から 4 億年前の貴重な化石であると共に、分類学上からも重要な資料であると言えよう。当該図では、分枝部とサンゴ個体の縦断面～横断面が観察出来る。第 1 図, B ～ H は、全て国立科学博物館標本である。B, E, F はサンゴ個体の横断面、C, D, G は縦断面、H は個体壁の構造、をそれぞれ示す。さらに、F では隔壁棘と壁孔、G では完全床板、の存在を確認する事が出来る。*Thamnopora hayasakai* は、小型のサンゴ個体が集合し樹枝状群体を形成する形質や産出岩相の特徴から、内湾や礁湖のような波浪の穏やかな浅海域に生息していたと考えられる。

種名のハヤサカイは、早坂一郎博士に因む。古生物学者・地質学者で、東アジアの地史や古生代無脊椎動物の研究に功績がある。

## 文献

茨木洋介・児子修司, 2012: 新潟県糸魚川市蓮華地域から産出したデボン紀サンゴ化石群. 環境科学研究 (広島大学大学院総合科学研究科紀要 II), vol. 7, p. 105 – 110.  
Niko, S., 2003: Ludlow (Late Silurian) pachyporid tabulate corals from the Suberidani Group, Tokushima Prefecture. *Bull. Natn. Sci. Mus., Tokyo, Ser. C*, vol. 29, p. 9 – 18.  
Niko, S., 2005: Devonian pachyporoidean tabulate corals from the Fukuji Formation, Gifu Prefecture. *Bull. Natn. Sci. Mus., Tokyo, Ser. C*, vol. 31, p. 13 – 29.  
Niko, S., Ibaraki, Y. and Tazawa, J., 2014: Devonian tabulate corals from pebbles in Mesozoic conglomerate, Kotaki, Niigata Prefecture, central Japan. Part 1: Favositina. *Sci. Rep., Niigata Univ. (Geology)*, no. 29, p. 53 – 66.



第1図 岐阜県高山市の福地層高原川部層産 *Thamnopora hayasakai* Niko, 2005、薄片を透過光で撮影。  
A, HMM 03062。B, NSM PA 15625。C, NSM PA 15637。D～F, NSM PA 15644。G, H, NSM PA 15648。  
A～E,  $\times 5$ 、F, G,  $\times 14$ 、H,  $\times 75$ 。